

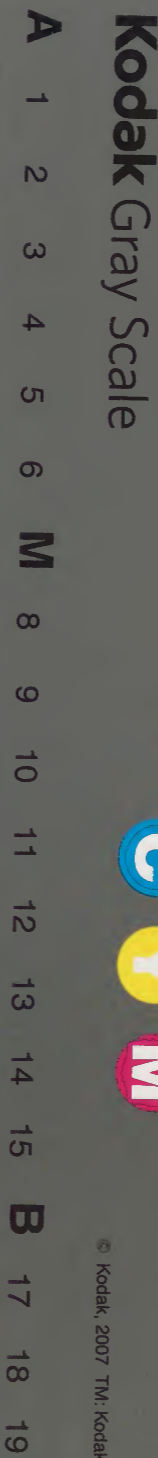
禮源鈔

二

和書門類			
二八六〇七	八二函	九架	五册

内閣文庫		和書
二八六〇七	八二函	九架
五册		

内閣文庫	
番號	和 28607
冊數	5 (2)
函號	199 135



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

編海防

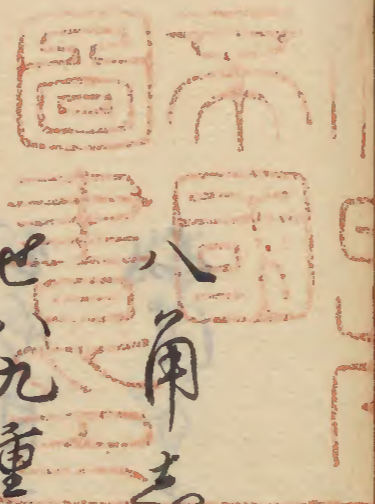
箱下

八角為。内におく美世にあまねくをくま
世九重光のたまふに花のこをま枝のまを
地中におく人の名をいれりてふ民の海に地
世に若くは孫に傳ふはまはまはまはまはま
世に世に世に世に世に世に世に世に世に世に
世に世に世に世に世に世に世に世に世に世に

八角志る御女く英世にあま福くをりま
せ九重れららまとい嵐のくをも枝をあらさぬ

時あいて人の心を此に引く民は海と煙たへ
世にあはれはるる征夷將軍作り
世にわたりてはるる乃海のくも七波志は

有るも島山乃あふ教年此争あ成不体志



高玄應仁元年正月於上五靈合戰有り
あれぬ人れふよ思ふあぬ世乃何の事
始といふあつと迷ふれも福なく静澄して
之を此花乃都風うまり多思福をうら
うふあうれも宿と此あまふあはく
心と目うあれ侍女又あやめ何軒の
志はく人乃被ふ落してそのはく一死是

婦といふは免て弓胡藤ありて何れふ
何やまふやとあま大石蓮と成左右にや也
て武家流所まづりはとりれ既及合戦
半方陳にけりれ時乃あて地をうこしあ
行魂も人よそまぬ許不中く申にまお次
妻ハ法家祀流
載之ハ仍略ス 志はくは治秋朝臣ハ院所新
市路園のあまよ程作光乎ハ器大子丸
目下抄物木山

上西塔院南尾に不縁此坊多しと依て頼重
さいやうやうして住山し侍る間京中合戦此
様所がよきと此斗に在る正月のあ家戦早
速に事行侍る則可属意為昔存處
逆風を成志流す此世ふよちかき林乃空
めをきうらま新田初濃此本もも尋えむを
く雲はる魚の月を余不し御覧せられ侍る

やうにさうしありしに侍きて國々不し此軍勢
のかりありあり城さうし福攝をさうしり
して晝夜此さいいもやう合戦 兵 如業
其て小室町殿一御幸初音さうし世をい
侍るうし不及びしれとを御敵いやく
せあやうと通侍ぬ魚れともあ産産産か
此様もありしう魚のうし想大君らあられ

おうく所敵よあをうらまひあはれしや暫し勢
せしむるはれあはれしや及敷く月侍りしは
某荒序相傳事十七某 豊林 霜月に
可傳事旨格處よ悲母俄痛事出来
侍りしは界七仍延引く不運至歎てもあ
まともとの也殊乱世文に難期後年召此
趣敵慮再上意へ申上更則 市暇被下

己父山上南尾へ登山して於光林院八月
小大曲校之同年十二月よ八幡宮為山神更
知形如指八間庄下向して時是此山神用
に糸勤先くれハ八幡ハ所敵祓禊の左不
あはれハ御講より直み糸糸道此より
上よ信てハ幡山此道より居侍りて所神
事專よ糸勤ハ至之者神妙如由被成

御奉書之間一家者召具被知所よ至
居し侍る其明かき^二應仁^一二月に於彼居兩入
調傳之其已後嫡々相承深秘^悉傳文之
し侍身此高運係先祖此擁護よ依く速に
一流を相傳道の真加不可とて深記録被
下可存知故矣亦傳之以種之冬冬あり
寺満乃其にもたし侍其三月上旬七又為御

礼御攝一糸洛寺下向の洛次を中風頓
出やうくいつり傍洛して死すといへども
そのくく本復たの偏よ道此事程
可尋問より再三中洛よ諫云ありくも後六
盲目此杖をうくかい幼少此ぬのとよほあれ
たむむく侍ん時悔もこれも可習哉と
のりさ満みるくくに覺ると涙をながらす

申上道傳しと既四十余回に及といひて
更於其詞者口それあ津よ子と思ふ心統
闇さうり傳つんと存され、熱欲徹骨奮
渡遮眼心々更此やうよ傳道ともあると道成
たうあると稽古を嗜むと傳さるる一、不
孝の科とのれるると思考教代れはあよ如
形性を行き道を傳くありてこれありて

小尻り終るる屋をいふを存せり一人の娘
男めといふも不傳し他人も概ん此族を
けさハ不殘し傳事ありふさるるおしく
傳れハを此ぬりれり免屋をいふをたより
やう茅屋れ間日くくくくくくくく
うあめ思ひ出るにあらん、條截を刺
及なりぬとれをいふぬ事ともあれとも

子孫乃者みるべき時ハハヤシク此より進道の
めやられるとを際てよきと此にあらにありむらん
きは故実ある人の筆跡もわく出入符の詞あり
ふ前後相違しわくかよ侍と後業此よりかき
辱存としとも態と漢字と不書く文音此者かき
ふ頃や此より方にしむた是ありしむも又幸ありし
此道此執ら一分此志を悟して是をみるしむ

一才一不審此はきなく思ふ出よきふて載く
間此才不回かきし先非道の人筆とあよ
を象徴式として間如何の春ハ鳳凰此書を
うけりこれ誰とせよ知れ也等しうりを
うけり幸風俗通二十二黃像鳳之身とあり
誠古方筆此神鳥不似るし唐此筆ハ口あり
して鳥此頭をのしむる様よ侍る也全神被

鳥ノ家事勿論之又問造始々人何者
ていふも其首を名存者乎左右いふこれ
次とよあふされもり治り此文あるか見
さるものゝ家ノ秘事也傳れざる可
申すも中これいすんあれもふ福の人
かゝら大方知てふも傳らんあれハ秘事と
被作事ハあふる文此傳ハ如何と云
難云

礼記 尔雅 新名 白虎通 說文 世本通典

蔡邕月令章句 文選 已下審也 事林廣記

殊普見人之も也 階 再 女媧氏造之早これ

道ハありこしより傳来とあれ此義を本

たふしといふれ始てふ知てんうをよ

考也とり可及亦面其時ハ如何譜代の家ニ

うまれて其の事をあふる者恥あり安よ

以受黃也

白虎通曰

笙之言施也。芽也。万物始施而芽^{キサス}大
簇之氣也。

說文曰

笙，正月之音物生故謂之笙。有十二
簧象鳳之身。

世本曰

階作笙。禮記曰女媧之笙簧。

邯鄲五經折疑曰

夫笙者法万物始生導達陰陽之氣故
有長短黃鐘之始象法鳳凰。

又白虎通曰

笙有七政之節鳥有六合之和焉天下

樂之故謂之笙

晉夏侯湛笙賦曰

嗟万物之殊觀莫比美乎音聲愬衆異以合休匪求一而取成雖琴瑟之既麗

猶靡尚乎清笙

古之善吹笙者

王子晉 見列仙傳

董双成 見漢武內傳

漢桓帝 見漢東觀記

魏杜夔 見魏志

已上

一柳笙此簧事此字不同吹物之別至

之振之志多一竹之笙乃簧之用事古來不

知之但為家に傳之事林廣記亦とて裁之

上者世之知所也物之行かるをうきて黄といふ

字を書子細如竹之れハ物中秘の事ナリ

先竹よりいさるく始々行そ出る也當時稿

少人吹之者志者く始々に損出の間後に加ぬめく

造るべきハ勿論也叔黄なる字を下し書事

如何答云宮高角徵羽の中徵乃々々ぬと

黄鐘調也此旨ハ半律半呂也故ヨ音律

乃中にあれを本と陰陽をく移る也

又黄なるハ中央土の色尤五音此内ヨ王なる下

心壹越調と同四方ハ方を兼て恒とくれるを

管此中ニハ笙を本とハるけ字を簧ヨ用也

又火相土也又中央ハ空也風ハ空をとりて

自互也口ノ中ハ空也舌ハ風乃とたきなり

これ心尤深原也可秘之六調子ノ取ニ悉有ニ

通用事ハナリ

一笙渡我朝 再奏始事

大同四年三月廿二日格云定雅樂 雅樂師

事唐樂師十二人答笙師一人嘉祥
元年格云戶減定樂雜色生二百五
十四人事答笙四人云々
國史之文武天皇大寶二年三月癸未
宴群臣於西園奏五常大平樂
聖武天皇太平七年五月庚申天皇
御北松林奏唐并新羅樂云々

今案唐國樂有笙以之推之笙之渡我
朝事已在辛年云々之比欵推古天皇之
時吳樂無笙欵仁明天皇之時音
樂盛我朝掃部頭貞敏及大戶清上之
輩渡唐國傳琵琶曲傳笛曲然而於笙
者不載誰人傳之但嘉祥四年格載笙
師四人之由了不可疑事欵

古來以笙得名輩事

古老傳云天曆時時有秋龍秋其後時

信弟子時光也相次有名時光者即時秋

祖父也堀川院時時時光獨步也上朝成卿

能吹笙即是有秋弟子云延喜五年正月廿二日

御記云保忠令吹笛曲調頗比聽自賜檣皮笙檣皮

笙者是故古改古臣昭宣公弱冠時承和天皇為令習學不給也寬年年中以甚名物召獻之其後為宣陽殿笙今尋舊意賜之

康保二年五月廿日御記云召雅樂笙師

九部利成不洽回有秋令吹笙

我朝

昭宣公

基經 関白良房

八條大將

保忠 元大臣時平男

朝成

三條右大臣 定方男

六條左大臣

重信 敦實親王男

中院右大臣

雅定

猪熊関白

家實

六角中將敦通

西園寺左大臣

公衡

中御門宰相

宗雅

帝王

村上天皇

有秋
師

堀川院

晴光
師

親王

致平親王

行光
師

當道

小納言小幡行見

同有秋

和迹部時延

豊原晴光

同時元

同時秋

同利秋

同豊秋

日録

ふれり、也、切、目、も、く、ん、進、ハ、志、し、り、の、こ、を

より、富、事、也、古、此、物、乃、出、之、を、み、る、よ、ハ、目、を

す、あ、て、片、目、に、し、く、又、傳、り、も、て、く、は、ら、れ、侍

あ、り、是、式、事、か、れ、と、色、道、を、深、せ、る、者、ハ

け、ん、を、知、る、く、は、ら、酒、を、て、ハ、人、ハ、不、可、詰

上、り、侍、る、者、ハ、可、ト、上、あり

一息入事

第一に可吹氣枕^ツ至次詳願^ツして不絶氣
 して可吹次句殊忠拍子^ツを能可^ツ執筆^ツハ
 不絶音次を以て為大事連者不堪以之可兼
 息乃志^ツ之方一の能なる一ノす^ツハ
 きれく好く^ツ也方末をハ留此^ツを
 一ノ序をハ上^ツ業^ツハ可^ツ吹^ツ
 時元云笙息^ツハ定也^ツ云息入

武家

刑部丞源義光

伊藤守頼義三男
陸奥守義家朝臣之舎弟

已上私非擇古記載之

一吹笙作法事 古記 兼秋撰十三帖同之

直ニ持事 利秋已前者雖用之近來止之

笙を右傾て額^ツハ付て頸^ツを解^ツハ左^ツ好^ツハ

傾右者憶右ノ目故也次^ツ闕^ツ臂事^ツを見

昔も又此後けらるるも、能く受師説也
私を右此目をかくは、と云又諸云當^時不可
用説也、い、めも直よ頭をうら、婦守顔に
は、多し可、吹之也、臂此持様、い、案にい、ら、を、
圓、を、よ、き、福、よ、と、か、く、婦、了、右、此、目、を、う、く、
と、傳、の、故、人、此、意、趣、を、あ、く、は、あ、れ、い、あ、此
目、め、て、物、を、え、れ、い、の、い、ら、め、お、目、く、み、え、て

此、振、い、筆、乃、す、う、く、可、吹、く、有、は、傳、之

一 行 移 事

達して後、可受師説、不然者、各、左、右、不可、換
早傳、い、ぬ、れ、い、く、世、か、來、次、い、く、傳、く、案、志、
手、と、云、事、了、く、僻、事、則、い、く、ま、う、を、此、手、と
い、あ、是、南、勢、古、れ、よ、云、い、き、い、す、る、も、是、も
不可、也、行、移、事、い、く、儲、乃、手、と、を、不、知、案、

因、革由之事あり郡以相習あり能
可交師説

一 可カウ事

南流之外無く

今世に不知人可有口傳

就中十下也

凡工一吹換不及注可交口傳

一 調子吹出事

音頭之笙吹出て殘合て息を習て後付

笙雖為一人乃至十人以同前就中雖為座
上於不恐之輩不習息前も付之但講
演之時者無骨聞ハ然る不恐者享らぬ
多下舞樂ハ魂有てきハ可多料取早付
之邊付と後の辭句ハおそきに吹物考人給
口を録乃とくに可吹可有骨心也

一 付物事

先以音曲為卒出と志かやうよと元くと
何を屬しめ随音可付くる為せし輩と
音ヤミよりハ動ハシきになり事未可然付物と号
上者争て可前立哉級後合になり也
以します可付く物者音を字て付を也
せめて此事也能く可得其心也

十種供養伽陀事

打促て略して疊ハ二ツあるを始之時者四の
句此終乃合行し句を不吹之指直て是此
伽陀之時急可吹之候事雖為何度如也

一 朗詠事

隨時ニ及之何れ雖為何度四此句之終此合
竹管ハ可吹之終句あるハ日終也又不吹
何ハ行してある流も也本儀ハ合行伽

陀^ニ一度朗詠^ニ二度可吹^ニ伽陀朗詠^ノ
付物尤可相替又今様^ノ付物中^ノキ大
事也伽陀朗詠皆相替也

一 講延^ニ時音取事

或云第一^ニ終^ニ可吹合行之音取次^ニ才^ニ二段^ニ
一行^ニ可音取其已後此段^ニ可吹^ニ之^ニ南都
管絃者每度^ニ音取^ニ甚色管絃者

新^ニ利秋之時始^ニ雖作出^ニ之上^ニ南^ニ下^ニ
伶人者只^ニ二段^ニ不可遇

此事南時不用之雅然
知テ子細人ノ吹テ不可制也

一 系竹^ニ才止樂事

先有^ニ五^ニ反者^ニ初^ニ反^ニ普通^ニ才^ニ二^ニ反^ニより^ニ加拍子
なり^ニ二^ニ反^ニ此終^ニ上^ニ折^ニ物^ニ時^ニ未^ニ座^ニ同^ニ替^ニ以^ニ才^ニ
止^ニ之上^ニ首^ニ之^ニ笙^ニ及^ニ此^ニ中^ニ半^ニ至^ニ可^ニ止^ニ然^ニ
二^ニ反^ニ十^ニカ^ニラ^ニ吹^ニ之^ニ也^ニ次^ニ笛^ニ四^ニ反^ニ此^ニ中^ニ半^ニ止^ニ

琵琶五反此中事不_レ止_レく_レ箏にて_レ引_レ断_レなり
 音類是_レ時_レ平調_レ大_レ合_レ調_レ樂_レこ_レし_レテ_レ不_レ止_レ他_レの
 調子_レも_レ如_レ代_レ言_レにて_レ不_レ止_レを_レに_レ傳_レを_レ秘_レす_レ也_レ他人
 不知_レく
當時者初心の樂人も
 け言存_レ泊_レ人_レ傳_レく_レか

一 舞樂事

柏子相進定_レて_レ物_レは_レう_レ吹_レたる_レに_レあ_レる_レ也_レ
 音類の如くも_レ大_レ事_レ也

御遊事

可_レ為_レ道_レ大_レ事_レ能_レく_レ更_レ庭_レ割_レく_レ好_レ可_レ堂_レ所作
 之_レ躰_レ繼_レの_レ秋_レ草_レ此_レ花_レさ_レき_レみ_レら_レる_レ中_レに_レ出_レ去
 あり_レ思_レれ_レ大_レ口_レも_レう_レり_レにて_レ屋_レ所_レま_レあ_レる_レん_レ刀_レを_レう_レて
 此_レの_レを_レ奏_レて_レ如_レ立_レ可_レ吹_レさ_レか_レう_レは_レく_レを_レう_レて_レ也
眞_レ性_レ古_レ己
 止_レ記_レ故_レ実_レ一_レつ
 一のあり_レ志_レや_レ孫_レ阿_レ平_レ双_レ調_レ子_レ吹_レ振_レ又_レ如_レ此_レ
 一 調子姿事

平調ハ春風ノ柳ノたをれらるるごとくこれを可吹

盤涉調ハ竹ノたをれらるるごとくこれを可吹

延テ吹下りしきより此調子を延テ可吹

黄鐘調ハ鉦子ニすゝたる酒を入めたるごとく

大食調ハ板ノきこ下りし半むつきを吹下りし

一越調ハ明障子ノ沙をうけり如く双調子ハ

左御遊交

け外ニ又後ニ可吹但申常ク耶又
古人秘しけ候し越々ハ沙汰者也

柳此ハ調子ハ姿如妙若治侍と云たりハ吹似

横口侍之書と不見他人ノ尋もあつて知人

多時お閑取お福入
閑取亡父にこれを不審此ハ

色取侍是ハ口侍のそりしき無き死て教諭を

唱てふ終へき事也とて筆を元也吹之きうせられ

侍一大事也下秘由思被り侍書に注事以

文を始とるる一故人筆記世ノある侍也

事乃才一と可思居實

一 平調 律秋西金 義白高臣

先年といふ字此心金ハ物をたゞるゝ心なり
仍平調と名付也此の姿事いりやる由也
春風ハ柳乃かむくゝ如しと傳也此調ハ秋の
音也然者秋季ハ福也喻ある事
春を門用事不審ハ故人も少く事あり

當家ハ傳く実唯一人也といふ先秋季
を此調の論ハ引事ハ十二調子を十二月
に配時正月ハ大簇也此名ハ平調也然者春
を用事尤も梅柳ハ木此中にてハ冬
發事諸木より早ハ此義ハ叶又姿斗
小喻する死句又ハ手うり傳る或答これ
事ハ大事ハ口傳也才三句をハ結句と

いふ事也け事なる人世よきこと也此也こと古風よ
好られて自由なる事諸虫よすれらるる前
い、福を能くそのあまとも後、世にまき此羽は
ふいに能く退きや、蜻蛉之れをあらん丸打
く丸具丸放三度の手志る青柳此糸乃
志る屋のなるか如風小物よ進てあむく
といひのりともさかひてて風色に流るる也

此うをえて喻る也け子蜻蛉
返と云也又眼此子也云
事傳る如何秘説中詞也譜よ返之又盤渉調
音ありあれと律の通申金相水乃心也又能
勝ル詞と云句あましく秘事也復た詞也いめ
志りよ余れ句よりともを入て可吹入調事ハ
荒序と好口傳極秘也傳事と如くも免
不可吹紙書余成とも如く不可吹道乃也眼子句
調書後

一 雙調

呂春東木
角仁青民

先雙調と云事上無調を父と下無調を母と
て生ぬる音なる故に双調と云也喻たる姿より御遊
取より流るると同じこれも春此調を秋字を引
て喻事不審若云此調ハ角也角芽
芽と云一切の草木地より生ぬ始ハ初芽紅
甲とて率候うらうらして出也これを芒角を

いづくに注ぐも大簇此氣を牙キヤスといふも同也
と云此草木地より生て花さき葉なるを
宗と云をさうぬ木に色付を極と云此者枝を
心よきと云と云下腰此刀よ子うらをさる
と傳ふ妙心也これハ秘中此秘事也子孫一人よ
可傳又同喻乃と云一吹口傳在ふ式若句を
して習と云此也才一の習也大方け調子也

元々よきう〜とあるもすゝめらにひき
やに七吹えはうひよ入此の難知い〜と意を
知んぬて師よ又うひ〜も調と傳る子この
調を卒とせり出れ共調也双々調とす
心也則十とある所六とに何の〜但十と
ある所七といふは過う〜此これの物といふ事也
其中にて詮を所をう〜て當にす〜又

お不音と云手〜笛よお〜と云心かす
應〜七ネ不具所五所ミは口傳也思ふて吹心
みる〜詞よえハ難分別者也

一 黄鐘調 律 夏南火 赤智微事

先此調子を黄鐘と名付事黄と火意
あがり火ハありたれ在阿う〜か〜た〜る也黄
よ書と似〜明也中央の云と通義也

鐘のさのほきとむ 濫觴とふ事 鶴執心と
こふよりいけるある水の海也そのあるさめり
されお目いさめてせられりるよ海川のみな
りとを聖觴とふ仍け調ハ半律半呂とて
陰陽をうぬるるおに音律のこなりとせり
に依る鐘とふ又 案事 鈍子よすみ
たる酒を入らるるを見らるる可也いぬ先

にきくといふいさるる心よ海こりき 風情を
一切乃之のほりやるる 喻たる也
又水音とふと得さるるハ水調乃曲まけ調
に水乃てあさるる外の秘事也南の卦とハ
離中断 三 かのいさるる上下れ筋ハ火也中の
切なる水れふありあり 黒色なる也又火の中
なる物不見北卦坎中連これハ又上下断 三 土

下にて水^中連たるハ火なり水ハ黒^中の事也
上下の水中ある火よりさしてなれし水乃
於こまへも水とみゆり也如世上陸乃傳
間水音を其謂有者歟盤涉調音事
ハ水ノ位勿論也も調音傳の事も双調音
本此位木相火如心通用して可傳其意也

一 大食調 平調と同音

此調子大方平調と同音也して志^中も呂不
傳多不審答云五調子ハ内律之呂ニ也
然者陰陽一なる謂ハ大食調と名付て呂
を傳ふる也あれりて世よ知不也先大食
と云枝調子ニ乞食調と云事要注たる
物あり而家よ傳へ五聲の音を定時各音に
六腑ハ當時音ハ大食調を此腑ハ傳へんや

尤其謂あり其義如何命門腑事醫傳を
尋ふ語云此腑を尋ふ似て無う如く霧霞乃
とくこ傳ころん如竹葉く無実極く傳是
とくけ腑尤肝要此事也人乃身の食事無
ていあるくく命の食にありと傳仍此腑の
五臓の寗也食留^{ツルキ}時ハ脹消時ハ減を如女
らてハ腹の食を留事ををり也如くくく其

用所ハ腑よりり姿此次極くくいの半此極
乃ちあり角つるをりくくくくくくく
有る先息乃入極後ハよりる心何る角
可更師流也何く吹と云句を角流をす
心よりりくく名付くく子志かと知く合吹
といふ句又坐を死て可智盤涉調音事者
前よ注く命門にて右腎配盤涉調ハ此

音其謂^マ但性^ノ火也^ハ黃鐘^ノ火^ハ心也
勝^ハ物^ヲを焼^ク火也^ハ大食^ノ火
天火^曰此^ハ心也^ハ暖氣^方君^ノ火^トうれ^ヲを智
尤^可妙^ク如^ク配^テ心^平調^乃同^音律
と思^ハ有^ト沙^汰心^平調^乃同^音律
呂^此亦^同斗^也

一 盤^ハ涉^調
律^冬北^水
思^礼羽^物

盤^ハ涉^ト名^付事^ト也^ハ
又云盤ハワタカニル^トヨム水ノ心^トスト云
盤ノ字^トカワル^レシワタカニル^心本^トス^レ

こありあそ^ク物^ヲを^ハ魚^ノ心^ハ能^クあり^也
えす^う如何^ハ何^ノ喻^ハ此^ノ魚^ノも^ハ余^ハ
調^子より^モ志^ハ川^ノに^ハの^ハ魚^ノけ^テ心^ハ陰^也
心^ハ以^テ心^ハ陰^也
陰^ハ志^ハ川^ノみ^テ志^ハば^ハある^ニ其^ハ法^ハあり^也
志^ハ川^ノなる^ハ有^ル魚^ノ火^ハ心^ハかり^ニあり^也

志くてもあつておぼるる一切此感のよみ喻るる
 に對ては調此心をいへるる一しよ生老病死
 此時の死よ宛寂滅乃心を去つておぼるる方に
 所作此節も多し他調子傳の盤渉音
 此調を本と云ふ
黄鐘大倉ニテは句ヲモツカニ
 平調ハ勿論之
 又千段活と云句これよ褒るる調あり此句ハ
 秘事也此の字ニ解又口傳云々又音音これ七下

乃所よるる處一實に音此あり喉ノ音ニ
 の音唇音あり七下いへるる音也
 して此事如何双調此も調此十ノ
 取つてすれは
唇元

壹越調 呂中央土黄 信宮君

此調も位中央ありて四方八方を結てその
 徳と云ふも也何一越よ名付也君此位尤も

之姿事者明障子ニ砂をくはうとて侍
女何答これいけ調子中にすまう侍手とりふ
あり前喻より若付るる歌け句此字志不能
お不きつまハ調子此すうをこれいへる
明障子小砂をわけてみるハ一ひきこまや
うふこへる物よこりはり此あさうううう
乃志かろりて執心の妙なる振よま

魚ノ平調有と此蜻蛉ノ魚此子ハ句うりも
うひく執心も振ありけ調よまをハ
如竹吹魚ハ一二三ハ吹替也_丁乞_オイ乞_イマ_マこの
後乃乞を重て吹を此調子めてハうき福也一七
初心人又ハ一大事此所作時此う可吹之
細者かき福も吹も略儀をわらうるも畧
儀ハいあ〜ねも執りて吹ハいあ〜ねの道者の

つとすえゆる晴れ時と斟酌する状姿を
吹あゝいさむと思えざる時とわけて常々
あれを吹あゝ肝要かき候すてあゝよ吹て
みよ次の手にうつるんれんあゝあゝと何れ
うあゝこ絶てあれとつ候よ吹てんれんあゝ
右の調子に姿就習方方け義分也重
筆之便在る者五常よ配ん可任之

又一説

此記者大神
景範家記也

雙調曲者呂是發心音躰也

磬得_ラ春三草、生出_ニ禾_{コメ}梢_{メクミ}萌_メ雙調曲

角_ノ色_ニ花_ノ榮_ノ白_ノ曲_ノ故_レ謂_フ雙調曲_ノ角_ノ木_ノ音

是_レ即_チ花_ノ嚴_ノ義_ノ音_也

黃_ノ鐘_ノ調_ノ曲_者半律
半呂是_レ修_ノ行_ノ音_ノ躰_也

譬_レ望_ノ夏_ノ草_ノ木_ノ花_ノ皆_レ散_チ畢_ハ葉_ノ黃_ノ鐘

調徵故調謂黃鐘調徵火音云是則大

集義音也私云此說不審

壹越調曲者呂是四憂死也厭大呂者般若經也厭生老病死也厭者生老病死也

譬四季中陸月老位於壹越調宮為中

橫故謂一越調宮土音云是則大品義音也

平調曲者律是菩提音躰也

譬至秋草木皆實定挽悉堅平調

高種、壹就芬曲故謂平調曲高金

音云是則法花義音也

盤涉調曲者律是涅槃音躰也

譬成冬ソニ僅見テ松柏許四方草葉枯梢

葉散先其根ツツサニ大地盤涉調羽藏ス故

謂盤涉調羽水音是則涅槃義音也

上无調者黃鐘能離ナリ仍變徵云元本

樂故謂 高者上无調

下无調者平調能^レ哺^レ仍變宮^云无本樂故謂下无

調者用可渡律樂又勝絕調大食調畢名混平調半呂半律也 賤者下无調也

自餘之調子枝調子也沙汰之外但鸞鏡調

壹越調之變故變宮^云

夫於調子者以五調子為本然者一^レ双大宮^云大食

混平盤黃律也高賤渡律^云是五行所^レ主法也

一 吹留事 本七息今八五息是用略

之^レハ三氣可吹之猶略^レ之^レハ一氣但舞樂管

絃ノ終ニハ時ニサ^レ侍^レ之^レ游遊ニハ一氣ハ不

可吹之 古記ニ載所也 今ハ此沙汰サシ

一 十二律

大呂 十二月 断金調

大簇 ^高平調宮 正月 平調

簇鐘
二月
勝絕調

沽洗角
五下无調宮
三月
龍吟調

仲呂工
双調宮
四月
雙調

蕤賓
變徵
五月
鳧鐘調

林鐘徵
黄鐘調宮
六月
黄鐘調

夷則
七月
鸞鏡調

南呂羽
中盤涉調宮
八月
盤涉調

无射壬午
九月
神仙調

應鐘丁
變宮上无調宮
十月
鳳音調

黄鐘六
一越調宮
十一月
壹越調

調子合竹事

平調乙
一乙律
勝絕調比
下吕
下無調工
下律

雙調九
十吕
鳧鐘調巳
美律
黄鐘調乙
乙律

断金調斗
斗吕
盤涉調下
一律
神仙調也
比吕

上無調工律

一越調九呂

鸞鏡調己呂

一 調子案譜法

打代フ 殘代フ 移代フ

氣替代フ

次才代才 一竹代竹 合竹代合

絕音代色

叩代フ 呂一度二具改殘如此引合也

送美具合竹

這言具合竹 允一度二具故殘如此

即火 延引引

一 秘事案譜

月千前 合十拾 石下 走乙越 口工 白美鼻 免一逸

金八針 甘也耶 手言 貝七質 久行形 水上 木凡

勿乞 王七望 友比

一 調笙次第

先以圖調合乙同音 以乙調七乙甲 以七調一音同

以一調下乙甲 以下調千音同 以下調言乙甲

以下調工乙甲 以上調美乙甲 以乙調八音同

以乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙同_音

以_乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙同_音

以上調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以乙調_乙甲_乙

以乙調_乙甲_乙

以乙調_乙甲_乙

以乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以言調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以也調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

以斗調_乙甲_乙

以八調_乙甲_乙

以_乙調_乙甲_乙

一 自大_乙至_乙細_乙注_乙之_乙既_乙以_乙十_乙世_乙以_乙十_乙世_乙以_乙十_乙世_乙

一 乞_乙一_乙工_乙九_乙已_乙乙_乙卜_乙下_乙十_乙美_乙行_乙斗_乙七_乙比_乙言_乙上_乙八_乙

一 千也

一 付物_乙之_乙合_乙行_乙事

一 平調_乙凡_乙合_乙修_乙十_乙合_乙

一 下死_乙乙_乙合_乙修_乙凡_乙合_乙一_乙說_乙修_乙合_乙

雙調下合 修七合 始乙合 修行合

黃鐘調十合 修一合 始下合 修行合

盤涉美合 修九合 修行合

壹越一 修乙合

一 答笙

一竹十九今ハ十七猶以十五ナル也但竹ハカリハ十七

在之各ハ簧帶口管平声ハ九寸一八分或九寸ニ分ニアタル

以是准之 余竹ヲ次才ニホソキニ隨テアク

ル但不用也 每笙ニ相替歛然者隨声

アクヘシ 私云竹ノ大細ニモヨラス又スアイノ

ホソキニモヨラス声ノ響キニ依テアクヘキ也

習ノ外ナルヘシ

一 舞入時笛調子ニ笙ヲ付事

先笛調子ヲ吹出ニ第三句ニ付笙一説ニ雖

何調子其正音ニアタラム時可付之譬へハ
平調ナラハ^笛ノ音ニアタラム時^笙ノ合竹ヲ吹
へシ余調子又以准之可吹之

一 管絃之時目錄出事

十種供養之時樂モ
此調子ニアラハ同之

三臺傾杯樂^{等元}兩曲ヲハ破急之中ニ他

樂ヲ書入テスル事在ヲ以外之秘事也口傳也
其故ハ兩樂共ニ不加拍子樂之間惣礼ニ此樂破

ツシテ余ノ樂ヲヘタテ、スヘシ皮ノ急ヲスル也一具ノ物
ノ中ニ樂ヲヘタツル事メツラシキ事也自餘ノ
樂ヲハモロハ不可准之

一 八調子

鳧鐘調^良 雙調^東 上無調^巽 黃鐘調^南

越調^坤 平調^西 下無調^乾 盤涉調^北

一 十二調子
配十二月
分十二時

鳧鐘調 正月 寅 双調 二月 卯 角調 三月 辰 断金調 四月 巳

黄鐘調 五月 午 一越調 六月 未 平調 七月 申 勝絶調 八月 酉

林鐘調 九月 戌 神仙調 十月 亥 盤涉調 十一月 子 鸞鏡調 十二月 丑

私云六調子ノ姿事已後注之條者他

譜ニモ皆可有之秘傳之中ニ書入事如何

ナレトモ專此等ヲ不知者器ヲ調故實ヲ存

朝家神事佛支等奉公アリカタニ仍

撰之入故人道ヲ行稽古スル様當時ニ大相

替ス當世者先目錄ノ面ノ樂ヲ吹畢テ一説

ノ打物ヲ傳受シ何時モ上ノ御用神用

講演ノ人数ニ加ヘキトハ事ヲセス小樂世

斗吹計死ヌレハ渡物ヲ稽古シ付物ヲシ腹

筋ナルヲ本トスル也他人ハトモアレ

子孫ノ者努ニミタリニ道ヲ不可沙汰也

一切物ハハシナル事ノ浅キニ深キ事ノ有キハ
可知之五常急ハ七歳ニテ笙始ニ吹樂也
誰モ能手ナレタルナレトモ故治煉ハ此樂
ヨリ吹タル人無之我モ大事ナリト云テ常ニ
吹カレシカ常ノ拍子ニモ不替アリシ能ク傳
テ後中侍ハ大ニ替也大般若經ニハ心經ニ
大事アリト云々妙法蓮花經ニハ壽量品

佛成直道也殊ニ末代ノ衆生下種
益之時分此佛經ヲ受持セムハ無間地
獄ニ可墮ヨシ定ツカレタレハ安コトニ一大
事ノアルコトノ午本也誰カ今ノ世ニ南
無妙法蓮花經ト唱サル者ヤハアルナレトモ
受持ノ儀ナクハ徒ラコト也五常樂急又
同之不習ハ同ヤウニ吹ト思トモ可替

如此事所々
ニ可注之

一 琵琶博士孝道入道造之残夜抄云

管絃乃かえまは中しく文道よそのゆく
ちとあるといふもこれを作し歌家此人を
うらむく知るとかへし不れ右調子此名を
文子よめいひくそのゆへいむし人の
姉妹よあかいらよ志あくうあす中を
系舞人あといひくそのゆへいむし人の

事あつてゆへいひくそのゆへいむし人の
たふとくうらむく知るとかへし不れ右調子此名を
ふよ回かまのほろを備あやうめして
あつていひくそのゆへいむし人の
て文子をいひくそのゆへいむし人の
道を傳ふらやあるあやし記事此庵志
る能戸目そら里あつていひくそのゆへいむし人の

きつるや。一よ。此の如く。此にあり。此
唐 天皇 高麗 あり。より。傳來る。道
梵 諸 唐 聲 韻 殺 割 志 別。か。り。院。の
あり。此の事。流をた。夫と。明。け。け。乃。此。の
よ。い。世。乃。より。ま。り。より。非。此。代。の。天。照。大。神。あ
ま。れ。岩。戸。を。こ。ら。て。天。下。を。く。く。居。こ。り
や。終。つ。ま。り。ま。り。の。神。の。ま。り

あ。い。て。神。め。り。終。不。よ。あ。そ。ひ。と。今。此
神。樂。次。よ。の。家。國。の。風。俗。と。い。ふ。こ。り
媽。り。と。い。て。お。乃。の。媽。り。の。事。も。也
あ。れ。の。媽。傳。の。媽。り。の。事。も。也。未。代。一。文。不
通。考。の。あ。り。生。ま。り。可。誤。事。一。定。あり。下
能。く。若。軍。時。文。字。を。學。ぶ。及。び。可。入。秘。し
事。を。い。儒。家。の。親。近。して。可。尋。明。者。也

一 第一樂事

樂ハ音曲ヲ以テ心ヲ調ノ宮高ノ五調子五徳
五戒ノ声ニ是ニヨリテ三業謂道衆善自出生
故ニ已ヲ見コレヲ聞ク者漸ク邪心ヲ翫エメ
終ニ正路ニ趣ク貴哉也聖徳太子此道ヲ
弘メ給フヨ故アルカナヤ實アルカナヤ夫伎樂佛
神ヲ敬フ儀式會場ヲ饒ル莊嚴也呂律

声ヲ調フ本不生ノ理リヨリ出宮商韻ヲ成
豈梵音声ノ響ヲ隔テニヤ然則大樹緊那
羅琴鶴王記預リ妙音大士ノ秦王普現身傳

スリ如斯之習審也雖然先法躰ヲ能定テ信スル上ノ成佛ノ助
行ニ用業アルヘシ努ム音律ノ通義ニテ可成佛コト不可有也

一 呂氏春秋曰音樂之所由来者遠矣本於
太一々々生兩儀々々生陰陽々々變化合
而成章形体既着莫不有聲樂由此生

孝經曰樂五声之主下首也樂由地生

說文曰樂五声八音惣名也

蔡雄月令章句曰五声八音合為樂六才也

禮記曰八音フコリ作諧トホヒラ曰樂也

山海經曰祝融生太子長琴是雷搖山琴

始作樂

禮記曰憂始制樂也

乞詩曰有瞽始作樂而合于祖有瞽在周

之庭也

禮記曰夫樂清明衆天廣大衆地終始

象四時同旋象風雨也

白虎通曰樂者樂也君子樂得其道小

人樂得其欲

國語曰物得其常曰樂樂所集曰声声

相保曰和細大不喻曰平

五經通義曰初成作樂所以禁奢侈滌

邪志通中和也

阮籍論曰樂者使人精神平和衰氣不

入天地交泰万物来集初學記

史記大史公曰音樂者所以動蕩血脉

通液精神而和焉也

漢書曰聲樂蕩滌人之邪意全其正性

移風易俗

孝經序云移風易俗無近於樂同云平者

作樂上以テ美スリ祖宗下以化兆民

又云黃帝ノ世ニ伶倫樂ヲ作ル又云樂ハ天

地須テ四時當ル民ニ德ヲ昌ナリ疾疫作

シテ妖祥ナレ放樂ト云

五經通義云東夷之樂持ホコラ牙舞助時
生也南夷之樂持羽舞助時奏也西夷
之樂持鉞舞助時ホコラ也北夷之樂持ホコラ干舞助時
藏也
古今樂錄云夫歌者樂之始也古今前持
而後歌以舞象其事然後被之管絃
歌中未必有舞ホコラ中未必有歌其五

或書云君子須臾不可離樂須臾不可作禮

或云黃帝咸池ノ樂洞庭ノ野張ル是ヲ天

樂ト云

同云樂ハ音由テ生スル所タリ其本ハ人ノ心ノ感

アリ是故ニ哀ノ心感スルモノハ其声嘯トシテ以

致樂ノ心感スルモノハ其声嘽トシテ以テ緩

喜ノ心感スルモノハ其声安トシテ以テ散ス怒ノ

心感スルモノハ其声粗祖粗トシテ以粗勵粗真粗心感スルモノハ其声直クシテ廉也愛ノ心感スルモノハ其声和ニシテ以テ媿也六物性ニ非ス物ヲ感シテ後ニ動シ声審シテ以テ音ヲ知ル音ノ審ニメ以テ樂ヲ知ル樂ヲ審ニメ以テ政ヲ知ル而メ治道備ル

荀子ニ云樂ハ樂也人情必免レサルトコロ也

樂宗廟ノ中ニ在時君臣上下コレヲ聽テ則和敬セスト云事ナシ樂閨門ノ内ニ在ル時ハ父子兄弟和親セスト云事ナシ樂鄉里ニ在時ハ族長ノ中カ長少同クコレヲ聽テ和順セスト云事ナシ故ニ樂ハ上ヲ審シ以テ和ヲ定モノナリ物ニ比フルニ以テ節ヲ飾ルモノ也今奏シテ以テ文成スモノ也以テ一道ノ率スルニ足レリ以テ

万變ヲ理ル足レリ是先王音樂ノ術也

一 ~~六代~~ 樂 天子祭礼皆用六代之樂

一日雲門 黃帝樂 名礼天神舞之也

二日咸池 堯樂 名礼地和舞之也

三日大韶 舜樂 名礼日聖 或曰望舞之也

四日大夏 禹樂 名礼山川舞之也

五日大濩 湯樂 名礼先妣舞之也

六日大武 周武王樂 名礼先舞之也

一 九夏樂

一日王夏 天子出入奏之

二日肆夏 祭礼尸出入奏之舜云賓客入門奏之

三日韶夏 同姓出入奏之

四日納夏 京四方奏之

五日章夏 納有功奏之

六日 齊夏 祭事奏之

七日 族夏 族人持奏之

八日 隊夏 賓醉而出奏之 搃不審

九日 鶩夏アツ 公出入奏之

又曰

扶伏羲氏樂 扶持 神農氏樂

咸池 黃帝樂 雲門同

顓頊子

二 六 莖 帝王頃樂 詔謹上行

三 九 夏 帝學樂 圭水 同圭水一字三義 山ノサキ

四 太 商 或作華 堯樂

五 九 韶 或招樂 舜樂 詔時 昭文ナフツクヒ

六 七 夏 帛樂

七 大 句 古雙 周公丹

八 大 灌 湯樂 謹 二護 大武 周武王 武王伐紂

謂之八樂

清樂 九代樂也

周漢吳晉宋齊梁陳隋

後謂之清商末隋平陳周清商着物

謂之清樂

會要曰燕樂部云武德初未暇改作母燕

京同清舊制奏九部樂一燕樂二清商三

西涼四扶南五高麗六龜茲 又屈 七安國

八疎勒 又住舍國 疏永 九康國也至貞觀十六年十一

月安百密奏十部樂先是代高昌取其

樂付大常乃增九部為十部使今

通典所載十部樂无扶南祇

有竺樂事見南豪樂其後分為

五坐二部立部有八一女國周平安齊所作

周代為之域舞 二大平樂亦為之 五方師
子舞 三破陣樂 四慶善樂 五大定樂亦
謂之八絃同軌樂 太宗平遼西時ノ作也 六
上无樂 高宗所作也 七聖壽樂 武后作
舞時行列成字子 有聖超十舌道秦百王
皇帝万年宝祚弥八光聖樂 玄宗所造坐
部仗有六部一讌樂像文成所作
是又有中景
雲未慶祥亦破

陣樂美
天樂

二長壽樂 武太后長壽琴所作 三天

扶樂 武太后天扶年所作 四鳥歌 万歲樂 武太

后所造 五龍池樂 玄宗所作 六破陣樂 亦 玄宗

所作 坐部技

先四破陣樂 ト云事アリ 皇帝 武昌 秦王

散手アリ 允破陣樂ハ 怨陣ヲ破シテ為形樂

故アリ 云 付之案之 皇帝ハ 武舞ニカタトリテ

作ル故也此字ヲヨハルサレ~~ル~~唐土ニテモ帯テ劔
舞之唐舞ノ後本ニ見ヘタリ又古キ舞曆
四帖ニ大カタク手アリトシレサレタリ太平樂ハ
戰陳アラス演會ノ有舞イタモニモ~~モ~~リシユヘニ劔義
ヲトル仍此名アリ又武將太平樂トイフモ
同心ナルヘシ秦王ハ隋代ノ暴逆ヲ誅シテ作ラ
レシ故ニ名之散手ハ新羅軍ヲ平ラレシトキ

宝冠ノ姿ヲ舩ノ舳ニ現シ給シ故ニ名之サレハ辰

甲カクノ時ハコラヘカラス私云宝冠ト申テ侍リタル此外

ニ又胎昭ノ戰陣ニシテ奏スル子細アル故ニ

名之私云舎毛ノ此舞樂ヲ奏タル音ヲ聞テ軍

ノ勝負ヲ知ル事ノ侍ル也皇麁ハ黄麁

谷ノ戰ヒニ死セサル事ヲカナシシテ作リイダサレ

タル故劔戈ヲ取ラサレトモ名付テ侍ル也此兩曲ノ破

陳樂ノ名ハ尋常ノ人シラテモヤ侍ラシナレトモ
古記録トモ見テ侍レハ載書之侍也又五支
樂ト云事アリ大般若經第七十七云ク五支同音
義云ク絃管鼓歌詠コ五支樂ト云也ト云
又太子傳云太子供養三宝ヲ用ヘ諸蕃ノ樂
或不肖學習或習習不信而今永業習傳
テ宜ク免課役ヲ即令大臣奏舞

中原師元云詩書禮樂此四者治國之大要也
以配四季詩春樂夏書秋禮冬以此也今世漢
以廢然而書者尚似用之故以何者古者被
書推古凶學者勘書注善惡礼又雖已間
似用礼神雖疎尚致祭礼都絶者詩與樂也
先詩無知吉凶之人聞樂無知治世亡國音之人
又時元云大嘗會樂ハ上代於時其覺アル者一人

奏之云私云亡國ノ音可除之トナリ 賴義云為樂所預猶作之

相繼之是季一人造之奉之人肉分テコソ 語

樂云定レ近來不知有覺不覺不論堪能

不堪能各以奉之誠不足言牙也 言カ也

一心有名云古向云古向云古向云古向云

新樂 散樂 中樂 唐 林邑 童

高麗 新羅 胡 吳 妓 神 催馬

猿 由 度羅 女 奏 試 調

立 居 昇 降 延 早 於世

由利 寄 吉志耶 百濟齊

已上

又貞觀十二年二月廿三日貞觀寺供養時

雅樂寮唐高麗樂大安寺林邑樂興福寺

天人奏 又勅樂 東大寺花嚴會

二、西樂門、左方新樂ヲ名付侍リ、八幡放生會ニ
朝座、終ニ中門ニ列立テ奏之、是ハ一天ノ君ノ行
セ給故ニ其樂ヲ勅樂ト云也、凡樂ヲ作習作
者皆思トコロナリ假令竹禁ハ延テ作欵千
秋樂ハ事外ニ早ク作ルト見也、每樂如此意趣
皆所見也、能可思惟者也、

一、七言樂事

七言ノ樂ト云物アリ、所謂扶南良君子倍臚
如此也、必不可違七言笙ニ終テ吹延ル所尤可
聞也大哉、入道重家ト申人或所ニテ有七言
樂之由被命、或人云詩ニテ七言ト云事ハ侍ト云
尤故實ゾシラサル也、詩ト樂トハ是一脉異名ナリ
音ヲハ樂ト号ス、詞ヲハ詩ト名ク、然レハ彼命已ニ相叶欵

私ニ云ナケカシキ哉、諸樂ノ詞不知音ハカリ、殘テ誰モ吹トモ謂フ不知又
少シ殘モ大方也、依詩則樂詞也、能、受師說可吹之、名經文傳在之、可知之

一 半拍子事

樂ノ半ノ拍子ト云事アリ世常ノ人其名ヲメテ

不知哉初蘓莫者破ノヤウ也半ノ拍子ノ

樂五ノリノ蘓莫者淡河鳥鶴鳴樂甘州

只拍子賀殿破等也

一 以一曲為一樂

以輪臺為序以青海波為破

共盤調曲

以沉龍舟為破以散吟打毬樂為急

共黃鍾調曲

以鳥向樂為破以白柱為急

共盤涉調曲

以長元樂為破以千秋樂為急

共盤涉調曲

或長元樂急非千秋樂別曲也

當家說也

以安城樂為破以越殿樂為急

破黃鍾調曲急盤涉或平調曲

以新羅陵王破為破以陪臚為急

破一越曲急平調曲

以保曾呂具世利為破以賀利夜須為急

破一越曲急平調曲

以紺醉樂為破 以林歌為急 破一越調曲 平調曲

以顏徐為破 以新河浦為急 共一越調曲

以三曲為一樂

以朝小子為道行 以太平樂為破 以合歡塩為急

破 平調曲 道行急 大食調曲

以鳥急為道行 以嘉祥樂為破 以賀殿為急

共一越調曲

以兩朝樂為一曲

蘓合香 天竺所作急一曲 唐土作 霓裳

天上月宮曲 玉樹樂 唐土作 青海波 龍

宮曲 輪臺 唐土作 秋風樂 一帖 唐

朝曲 二三喚頭 日本作 賀殿急 唐朝

曲破 日本作

二曲異名

以輪臺弓道行以早輪臺為序以青海
波為破以皇麁急延吹為道行破急
又如常一說入時急吹猶弓道行
祝所吉事等不死用事
迴骨柳花花老君子竹林樂又皇
麁舞取捨衆
之姿也扶南玉樹遊子女
王昭君想夫戀

參音聲樂

春春庭樂夏應天樂秋萬歲樂
冬萬秋樂賀王恩太上天皇御賀用之
寂涼州內宴用之澁河鳥同上

臣下御賀三方秋樂鳥向樂

太平樂慶雲樂

參音聲樂舞人懸一鼓也仍古樂大鼓

上也夕下七新樂夕下十云下七叅音声二用
時八古樂大鼓三上へキ也

高麗

顏序

退出音声

長慶子

用通

還城樂

行幸還御用之

夜半樂

兼和御時御遊

用宗明樂

御願供養上高座用之

海青樂

南池院舩樂用之

越殿樂急

高麗

新蘓利古

放生會御輿還御奏之

常武樂

同前

行道樂

秋風樂、鳥向樂、澁河鳥、裏頭樂

高麗

黑甲序

狗五 佝拵

教光

垣破

長保樂破

供花樂

弄槍 十天樂

東大寺講堂供養始奏之
興福寺蓮花會奏之

赤白蓮花樂 汎龍舟

同寺法花
奏之

安城樂

同寺涅槃會用
之号常樂會

林邕樂

天竺名ナリ
作哲傳之

拔頭陪臚 鳥 菩薩

又云胡飲酒 獲莫者 劍氣禪脫 輪鼓禪脫

身用 叅音声 千金曲

春庭樂

有舞時新樂奏之
仍加三度拍子

賀王恩

御賀叅音声奏之右ハ古樂左ハ新樂
雖然叅音声時左右共付古樂拍子奏之

用退出音声曲

酒胡子 武德樂 輪鼓禪脫 長慶子

常武樂 進獲利古

用競馬曲 林邕樂 千金曲 蘇老非

汎龍舟勝奏之拔頭陵王小蘓芳菲

小馬形亦名伯龍

所用相撲節曲練舞輕舞

劍氣禪脫古樂胡声用之拔頭勝方用之

吉間号猿樂是也

春用產曲古樂胡声用之

長命女兒千金女兒

器用元服曲

裏頭樂私云此事不審古事者大替事

樂卜云事如此注之大略諸記載之所勿

論也雖然當家用說不用說相交以分

別可沙汰者也非秘傳上又用不可過之

一 五音委細說重可載之

通典百七十四卷

通典曰古有宮商角徵羽五引梁以三朝元會奏之階改為五音

白虎通曰音者飲也剛柔清濁和而相飲

五經通義曰何謂聲何謂音曰聲也人之本性也情生於心而形於聲之成文

謂之音

又曰五聲之聲為文章謂之音

漢書曰五聲者宮商角徵羽

高章也物成就可章度也角觸也物

觸地而出戴芒角也宮中也居中央暢

四方唱始施生為四聲綱也徵証也物

盛大而繁証羽字也物聚藏守覆之

也

七声

樂書要錄曰宮生徵之生商之生羽之生角之生變宮之生變徵又曰即有七声以成音調五声二變八絃緯相成未有不用變声能成音調者也故知二變者宮徵之潤色五音之塩梅又曰武王封高自平且至于允有七辰故

加以七音所以變徵變宮起於周武王

八音

通典曰八音者八卦之音卦各有風謂之八風

新唐書曰八音一曰金為鐘二曰石為磬

三曰土為埴四曰革為鼓五曰絲為琴

瑟箏箛六曰木為祝^祝敔七曰匏為笙竽八

曰竹為簫管
通典曰鐘聲鏗々以立號々以立摸不以立
武君子聽鐘聲則思武臣右聲磬々以立
弁々以致死君子聽磬聲則思孔封壇
之臣絲聲哀々以立廉々以立志君子
聽琴瑟之聲則思志義之臣竹聲濫々
以立會々以聚衆君子聽竽笙簫

管之聲則思畜聚之臣鼓鼙之聲
^護々以立勤々以進衆君子聽鼓鼙
之聲則思將師之臣注曰號々令所
以警衆也橫亮注謂氣作充滿也弁
謂分明於節義廉々隅濫之意猶鼙
聚也會猶聚也聞籥器則人意動
作

律呂

六帖律呂部曰律本注律曆志黃帝使
伶倫自大夏之西取解谷之竹其竅厚
薄均者斷兩節而吹之為黃鍾之宮而
制十管以聽鳳凰之鳴其雄鳴為六鳴
鳴亦六以此黃鍾之宮而皆可生之是為
律本注曰大夏西戎國也解谷之名也竅孔也

取竹孔與肉薄原均者截以為管也

又曰六律六同注曰六律合陽聲也

六同合陰聲也此十二者以銅為管轉而

相生黃鍾為首長九寸

史記律書曰六律司馬貞曰律有十二陽

六為律黃鍾大簇姑洗蕤賓夷則無射陰

六為呂大呂夾鍾中呂林鍾南呂應鍾是

也名曰律者積名曰律述也所以述陽氣也律曆志曰呂旅助陽氣也安古律用竹又用玉漢未用銅為之呂亦稱間呂故有六律六間之說无間大呂二間夾鍾是也漢京房知五音六律之數十二律之變五六十猶八卦之變為六十四卦也故中呂上生執始下生去減上下相生終於南呂

而六十律畢凡六十律皆由黃鐘而生漢律曆志曰律以統氣呂以振湯宣氣通典曰先王通於倫理以候氣之管為樂聲之均吹建子之律以子為黃鐘十一月之辰名子者孳也陽氣至此更孳益而生故謂之子也丑為大呂十二月之辰名丑者紀也言居終始之際故以丑為名寅為大

族正月之辰名寅々者律也律者塗之義
正月之時生万物之律塗故謂之寅卯為
夾鍾二月之辰名卯々者茂也言陽氣至
此物生孳茂也故謂之卯辰為姑洗三月
之辰名辰之者震動之義此月物皆震
動而長故謂之辰巳為中呂四月之辰
名巳々者起也物至此時皆長而起也故

謂之巳午為蕤賓五月之辰名午々者
長也明物皆長大故謂之午未為林鍾六
月之辰名未々者也言時物而成皆有
氣味故謂之未申為夷則七月之辰為
申々者身也言万物皆身躰而就故名
為申酉為南呂八月之辰辰為酉々者猶縮
之義此月物皆縮小而成也故謂之酉戌

為無^射九月之辰名戌之者滅也言時衰滅也
故謂之戌豕為應鍾十月之辰名豕之者豕
也言陰陽氣殺萬物故謂之豕
已上五音再律呂悉以非所私擇絃管抄
被撰之旨載之為明白能此上受師說可學也
一六調子譜曲古來口傳故實可載之但譜者
畧之說多之猪尾餘殘在之者追

書二可載之

一 平調

大國名太平調
本朝大畧之

樂書要錄曰夫金剛健而能斷其位
西方以法制恩不畏強禦不侮輟寡賞
賜不連所憎誅罰不阿所愛樂當官
於南呂用鐘和樂於西郊
禮記月令曰孟秋之月日在翼昏建星

中且畢中

孟秋者日月會於鴉尾而斗建申之辰也

其日庚

辛

庚之言更也辛之言新也日之行秋西從白道成就万物月為之佐時万物皆肅然改更

秀實新成又同以為日名焉

其帝少皞其神蓐

投

此日精之君金官之臣自古以來著德之功者也少皞金天氏蓐收少皞氏之子曰詠為金官

其蟲毛

象物應涼氣而備寒孤為貉之屬生旄毛者也

其音

高

三分徵益一以生高之數七十二屬金者以其獨次官臣之象也秋氣和則高聲調樂記曰高亂

則改其官壤

律中夷則

孟秋氣至則夷則之律應夷則者大呂之所生也三分去

一律長五寸七百分寸之四百五十一周語曰夷則所以詠歌九則平民無貳

三臺璫

新樂

中曲

亦名天壽樂

有轉近來絕畢答舞皇仁又長保樂

本酣醉樂

玉監物

賴義綿曰舞云

序四帖

拍子各八或三序四段

破

拍子各中六

急三帖

拍子各十六

件序犬上是成

舞

師久リニ時

此ヲ秘

スルニヨリテ不傳仍永ク絶畢又説云ク序二帖
拍子各八樂二反ヲ以テ舞一帖トス仍十六拍子者也

破拍子各十六

有喚頭八拍子秘之

此曲唐國乃物也醉鄉日月曰高宗之后
則天皇后所造也初拍子五已下一帖二帖
共三拍子不加此破本三帖ナリ其時ハ終帖ニ加三
度拍子而今世終帖終タルニヨリテ不加拍子ト云ク

拍則季モ申由基政等カ記ニ見タリ拍光時
自筆舞譜ニ云ク破二帖終帖餘ノ舞ニ准メ三度
拍子可打而近代不打之頗其故ヲ不知或記云
終帖ノ始ヨリ打三度拍子ヲ云々此説已ニ光時調叶
歛又曰三臺破不付喚頭侍也其故ハ舞絶也絶
樂ヲハ喚頭トテ吹ヲアリカタキ事ヲ沙汰シイタス
間ニ不付ヲ為秘ト而六奈入道蓮道鳥羽院ノ御

前ニシテ此樂ヲ吹仰ニヨテ喚頭ヲ吹時不付
鳥羽院仰云不付之奈口惜ト云侍従大納言
成道基政說云未ニ拍子加三度拍子云依此說
一及時モニ及ノ時モニ可加之彼賀殿破等准之
所謂拍子如加說世常人不知上者加サラシ本
ス只其日ニトリテサモト思ハレ時此說計テ可加也
加說ヲモテ秘說也當破ト傾盃樂破共ニ拍子

ヲアケス然而兩曲ヲ用ハ三臺ニアクヘカラス傾盃
ニ上ヘシトイヘリ此奈今案トキコタリ兩曲元ヨリ
拍子ヲ上ヘカラスハ一日兩曲奏ニヨルヘカラス可上儀
タラハ一曲ヲサスヘカラス只ハ換合三四帖同奏ノ日ニメ
拍子ヲハ一ハ可打同ハ四帖ニ可打由イヘルカ如シ然ハ
更正義ト云ヘカラス抑終帖絶タリトイヘトモ殘所
終帖ニ加拍子奈眼前也賀殿元四及今ニ及陵王元三切今ニ切

万歳樂 元七及 今三及 甘州 元七及 今五及 裏頭樂 元五及 四及 今三及

賀王恩 元五及 今三及 感城樂 元五及 四及 今三及 秋風樂 元五及 今三及

還城樂 元七及 今二及 傍例一曲ニアラサル上ハ三疊至

テ不可加拍子由稱奈頗ル所見セバキ似タリ當

流ニ於テハ加拍子説ヲモテ秘説トスル也 拍先時説 尤同前

一及ノ時ハ末ニ加拍子ニ及ノ時ハ終帖ニ初ヨリ可加之

急三帖 拍子各 十六 有換頭 四拍子

初拍子^五已下早四拍子終帖ニ加一拍子常用之説

加三度拍子秘曲云才ニ及才五拍子アリ加一拍子

南宮親王御記ニ云加三度拍子用否可尋

又秘説云傳供并ニ行道十トニ^加三度拍子ト云

又知足院禪定殿下仰云此急彈物ハカリアル時

笛ヨリ吹出ゴトアラハ吹出四拍子ヲス才五拍子

由中下中アリ吹出頗ル興アル説也 云舞立時

此急ハ早吹ヘシ

舞子アラスミテ
延タルハワロシ

賀殿急

延テヨシテユミテ
早ハ舞損ト云致

毎度如此事心仕アルヘシ樂人舞人相談故實トス

舞出時吹調子

品

入時當急ヲ重吹テ舞人南向

時加拍子或云保延元年七月廿九日内裏舞御

覽ニ三臺破ニ及拍子不加之頃杯樂破第二帖

加三度拍子抑此兩曲勅定ニヨツテ如五常樂ノ入

時舞人皆入綾ヲ舞ヘキヨシ仰下サル仍各忠節ヲ盡ス

誠ニ未曾也自今已後勅定之外不可有之事

抑唐高宗皇帝ト申御門ヲハシテス此御時

臣下ニテ張文成ト云人アリ姿カタチアリサヘナマメ

カシラキヨラニテ色ヲ好ミナサケ身ニアヒリタリケレハ

世ニアリトアル女サナカラ心ウヨクハシホヘサリケリ此時ニ

アイハナメカセ給后ヲハシニシケリ御名則天皇后ト申

アミタノ御中ニ勝テ聞給ケレハ此張文成人ヤリナラ

ス物思ニシツミテイケル甲斐ナクト覺ケルミニ子テ
モサメテモ只此事ヲ思カタキヲ又云アワスル人々ニナカリ
ケレハ芥ヲツミ地ニ伏シテモ年来ニナリヌレハ后アサカラ
ヌ心ノウチヲシラセ給ニケル哀ニイミシクヲホサレナカラ心ニ
任セス御身ノフルニイニハナクサムカタ更ニナクテ明シ
暮サセ給文成イミシク覺ユル文ヲ作テ后ニヌ
テマツル此文ハ遊仙屈ト申テ我朝へモ渡リテ侍

后是ヲ見給度、御身モホロヒテ^ヌクワラホヘサセ給
ケルサテ自此曲ヲ作ラセ給テ御心ナクサメ給トカヤ
高宗皇帝崩御ノ後后トシテ代テ位ニツ
カセ給テ廿一年ニテタモタセ給ヘリキ此皇后ハ
二代ノ帝王ノ后ニ立給ヘリ又云此曲ハ殊勝ノ樂也
則天皇后尼寺ト云処ニ廢セラレテ作也第三句
戀句ト名ク第三句急也第九大鼓第十大鼓^ヲ云

又云大唐ノ樂也三月内宴曰帝王妃女儲君仍

三臺ト云此說秘ノ号三臺私云此臺ト云塩心有口傳

太宗所作也此急初拍子二付笙琴龍秋始テ

付之早四拍子ハ第二付之ハ法也此急ハ初拍子

五ニ當仍第二ニ付之者延間初拍子ニ付之此說

叡慮御感有之御用說ニ成侍ト下面目也

此朝渡事太上是成渡侍ト云

万歳樂 中曲新樂 名鳥歌万歳樂

答延喜樂 又地久三帖拍子各二十以樂二

反為舞一帖有半帖二拍子後反付初帖也

初拍子五已下延ハ終帖加三度拍子此曲本ハ

七反也而今世五帖アリケレトモ又絶テ只三反テ

也一二五帖也三四帖ハ絶畢略時常ニ八十拍

子ヲ舞是ハ一帖ノ初十拍子ヲ舞也則第八

拍子ヨリ加之一説樂五拍子加之但舞時不用
講演之時用之一説ハ第五拍子ヨリ加之サセト
思フ時トソ中古ハ^三拍子一帖半ヲ舞其時ハ
第一帖ト第五帖終十拍子舞也此時一及
二拍子ヲ吹テ又半帖へ及吹テ即加拍子尤有一
秘説
帖二十拍子舞時ハ第一帖ノ始十拍子第五帖
始十拍子舞テ半帖ヨリ加拍子也近代ハ十ヲ

略シテ初半帖十拍子 舞第八拍子ヨリ加之口注

説ト同舞時努々末五加コト不用之

二代御記ニ云延喜ノ後ノ年号八年ニテ改延長四年十月十九日大井河ノ

行幸ニ雅明ノ親王御歳七歳ノ時當曲ノ赴

舞給二帖也
忠拍子説 帝王感々へサセラワシメテ半臂ヲ

ヌキテカツケサセ給タリケレハ親王カタニカケテ舞メ

一曲ヲ^レ給タリケルトソ山階寺ノ別當ノ元日ノ
中帖曲ハ先ニ一帖忠拍子ノ説アリ出タルヘシ始ニ帖共拍子ヲハ常ノ延タル

只拍子ニツキテ三帖ノヲセメテ早吹也猶畧シテ二帖セ拍子ヲ舞フ其
朝拜ノ次ニ御遊アリ其只拍子ノ万歳樂ノ
ヲ琢ク沙汰シテ二帖メララセテ早ク吹テ中帖ノ曲ト号スル也中ノ帖ヲ畧スル曲ト云
時必首官一曲ヲ舞 昔親王ノ一曲也才三帖ノ舞乎ノ内
忠拍子ノ曲ニテ傳來タル也

始ハウチ任セタル御遊ノ忠拍子ノ由利吹
口傳スル也此名ノ付ヤウヲ秘スル也樂ハキカラス舞ハキカハル之三帖メラハヤク
半帖ヲ於世吹ニナリテ青海波ノ程ニ早吹
吹ト申モ只拍子也此事極シタル秘也延タル只拍子ヲハヤク吹ケハラセト云ニ同コレ
舞也是ヲ中帖ノ曲ト云以外秘事也此樂忝
程ノコトハ人可知ナレトモ口傳ナキハ不知也

音声并ニ舩樂立樂奏用古樂一鼓ヲ懸故
一二帖ナカラ只拍子ニ雅明親王舞給ト見タリ其元終帖ハ早カレシ只拍子トヲセ
也仍古樂搔拍子加拍子又云此舞ハ大曲ニ准
シト別ニ心得タルハ無口傳人ノ申也能ク可秘之

又云中帖ノ曲ト名ノ付タルハ三帖セナカラアル時ノ名ニハ非ス二帖セ拍子ヲ
ヘキニヤ大法會ノ入調ノ始ニ新鳥ニ合タル
舞時二帖ノヲ畧シテ一帖五帖ヲ舞フ仍中ヲ畧スルヲ云ト也是ハ後人ノ
事ノ侍也通典ニ云鳥歌万歳樂武太后所
樂也
造也一説武后ノ時宮中ニ鳥ヲ養フヨク人ノ

コトクモノヲ云フ又常ニ万歳ト稱ス仍樂ヲ作テ
モテ此舞ニカタトル三人緋大袖並畫鸚鵡冠
ワクイヌ
作鳥象今山嶺南ニ有鳥似鸚鵡養之
久則能言同云隋煬帝令大樂令白

明達造新声期万歳樂藏釣樂七夕樂
又云漢武帝嵩山ニ登ル時ニ万歳ト呼コト三
タヒ也上ニトフニ上ニモイワス下ニトフニ下ニモイワス
荊州記ニ云ク挂陽郡ニ万歳山アリ山ノ下一ノ淀
アリ千秋水トイフ其邊ノ村ヲ万歳ノ村ト云
或記ニ云用明天皇ノ御即位ノ時作之ト云ヘリ
是ハ聖德太子ノ御父也或ハ御作ト云ク

此御門ハ日本人王三十二代ノ王欽明天皇第
四御子敏達天皇乙巳九月五日即位隋高祖
大定五年ニアタレリ在位二年四月九日崩御
歳五十八又云私隋煬帝御代ニ鳳不出由
申傳然者御作モ不審堯帝舜帝御
時出也我朝持統天皇御代ニ渡白鳳仍
年号ヲ白鳳トス又云此曲ハ賢王之御時鳳

凰来テ轉音也件鳥音賢王万歳ト轉也

以件音為此樂曲也 私云太子御文用明御作不審被改之歎ト覺モノ也

不^レレ^レ律^レ業^レテ^レ能^レト^レい^レフ^レト^レレ^レカ^レあり^レ琴^レ能^レ

ハ^レノ^レ大^レ切^レノ^レ厚^レハ^レノ^レ人^レた^レハ^レ和^レ音^レ管^レ絃^レの

方^レす^レえ^レれ^レ多^レれ^レと^レと^レ支^レ轉^レ此^レハ^レ詠^レう^レフ^レ小^レ風

月^レ乃^レけ^レぬ^レハ^レ成^レハ^レあ^レお^レほ^レく^レく^レう^レあ^レ

志^レお^レお^レ也^レこの^レも^レあ^レハ^レ抄^レに^レか^レや^レに^レほ^レく

皇麁 有甲 中曲 新樂

破九帖 拍子各十 急 拍子廿 可吹十一及又七及近代五及歎

此曲者 黃麁 谷名也 於件谷作此曲 作者不見 古

遊声一帖并序侍ケレトモ絶タル間急ヲ延

吹テ為道行出舞也 鞞鼓打様如道行 古人号寄拍子 破九帖舞

七帖^レテ^レハ^レ一帖^レヲ^レ返^レク^レ吹^レ之^レ八帖 有喚頭 九帖 替皆

吹加拍子 拍高季説ニハ一帖アリ於世ニセテ八九帖

ヲハ殊ニ早吹之今大神氏ニ略メ舞ハ一八帖ヲハ
緩吹テ九帖ヲ急ニ吹テ即打三度拍子也
一名海老鷲唐黄麈ト云谷ニテ作之
妓女教説

一帖礼拜八帖天女纏頭九帖於世吹即
加拍子也左並寄テ袖カツキ右並寄テ袖
カツキ如此向四方舞急三及如三臺急舞テ

第三切初楚取加拍子左右捻向テハ足ヲ
蹴上ツ、舞也

持楚舞如蘓利古破一帖舞人礼拜二帖向東
居但是若南面之儀也三帖其舞有手四帖
初拍子解錦額五帖才三拍子以錦額帶腰
至才六結了六帖才二拍子自懷中出甲七帖才十
拍子着甲八帖四拍子結甲緒ニ九帖有手

醉鄉日月曰景龍中西戎叛ノ宰相王孝
傑征之戰於黃章谷死中宗念其忠
故作也
和譜九帖拍子各十第九帖加拍子三度拍子
畧定一八九帖有時猶第九帖加之一及時未
二加之一及時第七帖用之九帖ヨリ於世吹急管
絃時自二及頭加一拍子

裏頭樂 新樂 中曲 又作裸頭樂
一名散子作物 答舞敷子
三帖拍子各十二初拍子五已下延八拍子
終帖加三度拍子一及時未四加之 一說樂二加
之又說第七拍子ヨリ加之或說舞人南向時打
三度拍子所謂中半ヨリノ說也 拍光時舞譜
云四帖但今世二帖不受師說云

此曲李德祐作之舞又云明帝所作云樂
 同記曰大國法蛾拂之時錦羅絹綾等
 裹頭拂之大唐金御國ト云所了り一百
 歲一度大蛾千萬来テ害損人也其時奏
 此曲彼蛾皆悉死ト云或人語云霓裳羽
 衣之曲雖然無其謂者歟古ハ大法會行
 道用之天皇御元服後宴ノ日必奏此曲

舞出入子用調出品入波調秘說ニ云品玄

入ニ調ヲ可用之又云蛾コレハ蚊之ヲトリ虫ト注又云明帝

御製作分明此帝ハ後漢二代ノ王也又ハ
 顯宗ト云申漢高祖十五代之孫光武皇帝
 第四ノ子母ヲ陰皇后ト申在位十八年八月
 壬子東宮前殿ニ崩ス年四十八顯節陵葬
 永平十八年元年日本垂仁天皇八十七

年ニアタレリ八年^{乙丑}御夢ニ金人來ト

伊覽シテ同十年^{丁卯}摩騰竺法蘭ト云

二人ノ人漢土ニ來レリキ佛法是ヨリ起レリ

慶雲樂新樂中曲無舞拍子十五末^{或四}

唐書曰慶雲樂曲大祠享皆用之

通典曰貞觀中景雲見河水清張文

収採古朱鴈天馬之義製景雲河

清歌名曲讌樂奏之管絃為諸樂之

首^{今元會第一}景雲舞八人花錦袍五色

綾袴絲雲冠鳥皮靴新唐書曰

睿^{景雲}曰景雲之舞或記云大國法會事

時奏此曲於大唐望食有二鬼名食鬼云

飲鬼繫念人食惱人而聞此樂音曲彼

鬼神去七十里此樂本名^{謂兩鬼樂}我朝

慶雲年中渡改名付應雲樂

ハニ有ト元只拍子
或説ニハ
所此送アル間重テ

唐有此曲大祠京皆用之

諸ノ叅向叅音声躰ノ祝事用加三度
拍子

慶雲事世俗ニ紫雲たひきくやし

人の申と侍佛法ニハ一向ありて散若

法申侍諸節ニ類ゆる事あり平性生す

前よたふひくやしこれ推量に悦乃を

南中記曰此系之瑞膺堯を生る也云ハ

向猶向斗垂南風雲瀧漠之上到堯母

感氣扶袖雲受之して下之入堯母之

懐ニ堯を妊かり真義抄
載之此次注付事憚

多侍る子孫卯ハこても石可出愚礼

如多こるやの事まゝ書く先年予千

首をよんく三奈前内府家于時侍従大納言殿ト
申實隆伊事

歩合燕申入侍内也點標を

紫丸雲よりせし章都より小枝乃あふら花さうり色

う好屋の争にあまきうえ侍也女代事也

又樂乃めとあうて間他事めて歌乃此

故實河の屋も事をも可覺於也

永隆樂

拍子十

新樂

一及時樂四加三度拍子

是

者在大臣信相作之但在大臣信相

勅原免之曰作之一説二唐永隆作之

信作改給歟 忠拍子アリ加之度拍子

甘州

新樂

小曲

或中大曲

亦云作時州又ハ

名甘州樂

或甘州塩

又名衍臺有録

近來不用之

答舞

仁和樂又石川

又酬品樂五拍

拍子各十四初拍子四已下四延又早終帖加一拍

子是フ當家常用説トス一説云ク加之度

拍子是ヲ奈良様ト云常不用秘説或人
説云當曲林歌ニ對スル時加之度拍子本
七又其時六帖ヨリ加ク今世末二帖殘リ只五又
有四帖ヨリ加之此曲唐玄宗皇帝所作也
天皇後多以邊地名
甘州涼州是也又有故旋舞
之云 依勅致又而照千山ト云物作

五代史記 梁本紀曰唐玄宗名衍嘗

与太后大妃遊青城山宮人衣服皆畫雲
霞飄然望之若仙術自作甘州曲述
其仙狀上下山谷常自歌而使宮人皆和之
又云甘州ハ國名也彼國ニ海アリ竹
多ク生タリト云件ノ竹ノ根コトニ
毒地有銃虫多ク之ヲテ切得ル事ナシ毒
虫ノ為ニ人多ク死ス而奏此曲案如來テ此

竹ヲ切ハ彼出人ヲ不害金翅鳥ノ音ニ似ル
故ニ毒虫恐リナシテ害セニ心ナシ作切作也
舞出時子用調入時重吹當曲則加此樂有
只拍子說極タル秘事也空拍子說殊秘
事也即十六拍子之後成樂拍子鞀鼓秘事
泉郎大和氏ノ流ニハ無空拍子打此曲自才ニ返成樂拍子ナリ先時此曲
正清カ時ヨリ本法ノ程ヲ背テ早ク吹成早但

基改時元ハ獨本法ヲ存テ靜吹之正清不
改早吹其興ナシト早又云此曲延樂ニアラ
ス早樂ニアラス其ホトステニ中間也樂拍子ト
イヒ只拍子トイヒ其拍子間ハイヒアリ獨一打ヲ
身テ全ク此類ナシ又カコ泉郎ト云
又泉郎ト注ス可有習ク
又云此曲本ハ只拍子也而ヲ早ク吹テ樂
拍子ト稱只拍子被用所遊例

白川院御時承曆三年堀川院御誕生

七夜御遊用之

高倉院御時治承三年安德天皇御誕生

生七夜御遊用之

順德院御時建保三年先帝御誕生

七夜之御遊用之但非吉例者不可申

南宮譜云三反之後詠博雅三位譜云

三帖之後詠四帖之後詠其詞曰但近來

三帖後他

燕路波山遠胡閑易水寒

范之風囊動滄之陽停閑

四帖後

殘月蘆江白老花菊岸丹

行驚晚落冷葉落暮寒閑

一說

燕路灞山遠

胡關易水寒

流々風北落動

澹々陽假閑

殘月蘆江白

老花菊岸丹

竹鷺暖露令

葉落寒飄闌階吹二曲

又云此曲舞給テ更ニ吹テ同曲ヲ入舞也

此是度之拍子以後上拍子也但舞人ノ景氣隨

レニ舞人北向テ手ヲ合テ落居テ一度ニ樂屋

入時上拍子也又云今案醉鄉日月云々樂

之精莫過莫玄宗朝此者玄宗作尤取信

欵又玄宗既ニ知音律又酷愛法曲

五帝樂中曲或中大曲新樂童舞男舞

序一帖拍子十二以樂二支為一帖破六帖拍子十六急拍子八

五返舞之又五聖樂名禮義樂

或譜云大食調曲 答舞登天樂

唐太宗朝貞觀末大觀初帝製五常樂

曲圖 五常公作此曲平調入事
博雅三位說上云

仁義禮智信謂之五常者人可常行也

五常即配五音此曲能備五音之和

詠詞 雖有詞多說
依不用近來畧之

端譜一賦賀弘 二及

報恩者欲疑上 詠寬寶連疑

師賦賀鳴仁 天寬 五常樂

此破樂拍子吹時初拍子 忠拍子吹也

慶雲樂同前
是時元說也

又樂拍子吹時有二說 一說如太平樂破一說大
曲吹是當曲說人初四拍

子ヲ延テ緩吹
ニス一説アリ

急拍子 第二返ノ頭ヨリ加三度拍子

此舞ハ如右舞次第入テ樂屋ノ前ニテ
各乙テ入ヘシ又欲吹畢時テ笛吹様
アリ随分秘事ト舞家ニ傳テ
一説云序後詠云或云序ニ及後舞

人詠

嘆佛音世一テ芳テ感六六下中報一由恩一中二志中又二由中又欲申
詠詞多ク當時不用之間略之

白河院ノ御時醍醐ノ臺舞御覽有
ケル中ニ五常樂ノ急樂コトニ面白カリケルハ
舞人皆入トイヘト云伶人必凶樂音シアル程
被勅下云行高一曲ヲシヘシテ時行高
太鼓ノ前ニ進出テ膝ヲ突テ仰テ蒙テ
進御前一曲ヲ仕タリケルハ殿慮ニ叶テ頗
蒙所感云々此行高ハ妙急ノ初一返ハ不

舞之志踏押之拍子又急入之
北邊在太臣夢ノ説在此是則筆ノ秘事
ニテ侍舞出時吹調子入時者如右舞且舞止也
或云詠内ニ可憐衆鳥舞又下舞身三古曲
對七佛雲天祝五帝又進合ノ下
或云博雅之位譜曰但二帖詠之北詠四帖詠
七種淨土ノ粧直見國家之今日ノ榮云々

同詠句頭ニ又句終天冠五帝樂又
年号用當時

歎佛音芬感ニ又或云淨瑠璃之宮之城
近カラニ法之儀臨給ヘリ古之曲舞十
六拍子ヲ以テ舞一帖トス故樂ニ又ヲ以テ舞
一切トスル也如此例有之又云北序ヤワラカニ
吹ヘシアラク吹ヘカラスト多ク又云息ヲ入ス吹之
又云破六帖拍子各
十六初拍子五已下八終帖ニ加ニ

度拍子一及ノ時才十二拍子ヨリ加之

又云此破ヲ未拍子ニ吹時ハ初拍子ヨリ忠拍子

ハコトク也慶雲樂同即是時元説也

或託云ク由利吹浪當曲破不可稱他曲事

之破口一及舒也

又云急自才二及頭加之度拍子或説云加拍

子之後ハ鞞鼓ヲワケテ延タル四鞞鼓ニホヘシト云ヘリ

但非常説也加拍子様

基政云破舞早テヤカテ急吹出スヘカラス舞人

装束ヲツクロイナトセハ其サホウハ子メ後吹出スヘキニ

又云吹出ハ只拍子ニ吹出ス也才二及ヨリ加拍子

知是院殿仰云ク以急ノ終説ト云ハ初才一及奥才

一及ツ吹テ凡ノ二及吹ハ此説也

或云

富家ト申法性寺閨白殿ノ父公ニテニシテ宇治悪九府ハ法性寺殿ノ所舎才也

コレヲヤウラ吹ト申也

此急ニ終度ノ様ト云事アリ如常ニ及テ又今

一及吹加ル也吹様ハ別ニアリト云

六余入道

基通ノ云ク、樂人友正ニ及テト云

度其年ヲ替テ吹テ云

咄大納言

經信片能ニ云琵琶ニ急ヲ引ニ初ハ序吹テ引

出テ次果ヨリ樂拍子ニ引レケル也

推中納言

信綱此

祝ヲ案スルニ破ヲモ只拍子ニ吹出セハ急ヲモ只

拍子ニ吹吹或社云時光笙ニ吹ケルハ小竹ヲ拾給

テハ大竹ニテトノヘテヤウノ、吹ケル目出カリケル

季通ノ申サレケルハ非管絃者口惜也堀川

院ノ所時平調ニテ游遊アリニモノ、音ヨク

シニテヤウヤク暖ニ及フニ五常樂急百及及

ハ草木モ舞メルモノヲアルヘシトテユソハサレ

侍ニニ五十及斗ニテ天アケレハ時元排テ云

ルニ庭樹ノソヨクヲミテハヤ舞儀スルハト申ケル
ヲ目出心ハセカナト人ノイヒテ感ニ思ケルニ顯雅
卿イマタ殿上人ニテ無能ニテ其座ニ儀スニカタ
ライタキニ奏云クアレハ風ノフキ儀ハウコクニ
侍リト申タリケル満座ワライケリ
私云右ニ注スルコトハ上代タニモ如此有ク未代
譜代ニ生レタリトモ無智古道ノ者一カニ渡リテ

恥カシキ事ノ奇有盡期スワレ我モ人モ老
若ニヨラス物ヲハ学タキ者也
凡當曲ノ急百反ニハカマウノシレシアルヘキト覺タリ
サレハ廉承武カ靈モ此曲百反ニ及ハニ所ハハ必
ス行テ聞ニコソ申侍ケレ 又云當曲ノ
急秘説事嵯峨天皇崩御後勅信大臣
夢中傳賜秘説云
稱北山夢説是私云此説イ
カナルヤウカト望ニシキ也

又云當曲ト喜春樂ト入時舞人急ク皆舞
之余ノ曲ハ一者一人必留テ舞之也
又云禮儀公カ所作也
或云秦始皇作之云々但愚案女ノ作レル曲
ニヤ此舞本躰童也女ノ作レル樂ハ大畧童
舞也又云此急聖德太子尺八ニテ吹セ
給フ仍御作ト云々不審可ク尋之

柳平調ハ金音ナリ此音ハ義徳ニ主ル而
此調子ノ樂ノ中ニ殊ニ五常樂ノ名ヲ得ル
事此樂ノ義ノ一音ヲモテ本トシテ能ク五
常ヲ調ルカ故也五常ト云ハ仁義禮
智信也土ノ君王ニ信徳アルハ水ハ北瀾ハ
臣礼アル也如斯土常ヲ調ルカ故ニ上ニ義
アリ下ニ礼アリ王臣道ニ合テ國中ニ殃ナキ也

故ニ名テ五常 樂ト云也 故ニ樂ヲ人ニ教始
ニ大畧此急ヲ初学トスル也 曲少ケレトモ心
衆曲ニ通スル故ニテ侍也 當嫡家ノ口傳此
諸説ノ上ニアタノ習俗様故實在之真
義別紙ニ注胎金ノ兩部山王ノ二字ニ
習合事 在之 仁義礼智信ハ誰モ知事
ナレトモ 蚊虻ノ者ノ為ニ代末ニ注之

仁者慈悲也 則不殺生戒也 慈悲也ト
申ハ心ニ慈悲アリテ万事ニ付テ慈悲也
義者智也 則不偷盜戒也 義ハ和トハ
心ニヨシアリテ万事ヲ和ケコワキ事ニ申也
礼ハ順也 則不邪淫戒也 礼ハ順トハ
万ニ敬アリテ何事ニモ順ヲ申也
智者賢也 則不妄語戒也 智ハ賢トハ

万ニ四度計ナキコト云内外ニ付テ賢ヲ申也
信者貞也 則不飲酒戒也 信ハ貞トハ
万ノ事ヲウタカウ事ナク思定テソラコト
無ラ貞トハ申也 以上常ヲ朝夕心ニ
カケテ思振舞者何ニツケテモ世ニハソノ
ツカラ便リトナルヘシ身躰ワロキ者ヲハ人
ノアハレム事未ナキ者也 然レ可見之

廻忽 拍子十二又廻骨ト云新樂

以曲クワイ貴養成所作也昔大國ニ有一人臣号テ

曰貴養成彼有文曰大忠連忽受病死去

畢經百ケ日彼臣至昔下墓邊作一ノ樂琴

彈之至七返之時彼死骨息生廻墓三匝

之失早 仍名廻骨也伴曲
用葬也其時用古樂

惟季ノ説ニハ忠ノ樂共ニアリ 忠拍子時終下延ト
樂拍子時終可延ト

シルシヲキタリ但今ノ世ニハ絃管ニ此志拍子ハ

不聞也此流ニアリ樂ノ拍子ニモ當世ハ末ヲ不延而

ハ大鼓ハ返初ハ六鞞鼓ニナル也口傳云及付口ヲ六

拍子打テ如林并之度拍子打之

知足院殿佛説ニハ終ヲ不延ニテ吹出

干ノ元ヲ延テハ鞞鼓打説コソ目出説

ナレ又秘説ニテモアレトソ仰ラレケル

陪臚破陣樂 別様舞 天王寺舞之古樂

破 用新羅王破 急 當曲吹拍子十二

班朗德朗所作也 是天 三樂 向大國法清舍曰

於陳内奏此由知死生此樂七返之時有

舍无音我陣即勝怨陣即破若我陳无

此音自陳破怨陣則勝云 此舍无音何事哉可尋之古目錄陪

行即道或人云樂者波羅僧正傳來之給

舞者上官太子為敵身屋臣奏此曲之時
有舍仍自陣勝了其摸以舞所造云
但太子傳不見
日太子九器下七十

先舞出時吹林邑亂声于時右舞人出

作輪立定又_レ祢取吹新羅陵王破有二說

拍子十二說者奈良拍子四者天王次又

吹亂声又祢取吹當曲拍子十二以樂二反為

一帖謂之半帖吹說即加拍子如還城樂次又吹亂声作テ輪亂タレ合テ走リ入ナリ

天王寺公元曰吹亂声此間舞人出陣而作輪

舞人立定止亂声取音次陪肝三反此拍子

者如按頭今世如蕨莫者破始自公定一反

後上拍子樂三反間舞一反也舞乍持楯按

劍舞粗以泰平樂次吹亂声舞人昇降作輪如

初次又取音次新羅陵王破四拍子一反後

上拍子常儀作樂三返以此間當舞一反歎
舞礼用泰平樂破牙二反未執拵之午也舞
手六拍子許也但多少可右有舞人之心用同手
還舞故也舞人同寺之終作後突之午者未見舞手吹
豈後突者太平樂終手也吹亂聲此度者有昇降不作輪也入舞今見倍
作輪之辨疑破陣樂貞麻
鷲貫左右各同舞歎

唐招提寺 四月八日倍肝會

鑿真大和尚所傳也可尋

舞人僧

着甲袖搦太子多ホコラ拵ホコラ貫ヌイテ持モツ
各小舞人一人相制ホコラタリ

笛一玉手ノ

氏三鼓之連吹之也

大鼓步寺僧謂圓滿寺別當

某流歎自當不被未

樂屋袈裟威儀ヲ返
打之隨大鼓吹笛也

住僧說云每句可頻ニ步上

拍子有唱歌同志トウシ可同トウ是也又ヤタラ八多羅拍子云

推之招提寺倍呂走トウカトウノ鼓音也ト云

先吹亂聲如天不吹新羅陵王破直吹倍肝

不以常
倍臚

先自大鼓折出七八付テ其音拔太刀

舞七登舞云是謂倍呂走

顯天王寺之舞相
遠彼寺住僧云此

舞者以寺為根元彼子舞之時先教刻吹此曲其
間舞人迴當前數刻其子差足踏只用事也然後尚合

舞此曲也久流迴當
前稱道行欵

建仁三年十一月廿日東大寺之物供養曰

上樂林邑樂屋奏倍臚樂

用忠
拍子

尤樂拍子ニテ

有度侍ニカト元笛吹不知樂拍子說欵長慶

申ケル者ハ一向用樂拍子也サレハ樂拍子ノ

說ノ世ニナキニ侍ス

慶雲樂
餘樂也

私云專源義家義光合戰度コトニ試吹勝

ヲ得給下也此舍无音當家傳之大事也

軍事秘之中才一也

ワツホノ
字

同時可傳之

想夫戀

拍子

又想夫憐

拍子十四
可吹四返

有詠

新樂

元慎集春詞云昂同向來彈畢曲着人

又云執鞀奏此曲奏又有於世吹說鞀鼓如五

是漢禪供養說也有只加之度拍子拍子

又云相附連トモアリ

扶南拍子十四新樂又十二

大國法男女媼行之時奏此曲漢土有扶南

云所好色女多有之有男子為媼行彼

所之時奏此曲云 扶南削名也

善相云意見文如判事紀依舊置判事判獄云條也

六人捍明道法律者補任之使俱議也

科比祥定條章各逞其意然後奏聞

如此則然獄永絕罪人自甘不得持扶南

之鯨魚豈用堯時之擗古貫及家初及

或人云擗象宿揀仍獄宮繼譜曰舞者二人以朝露為衣亦皮鞋

古記云

唐有扶南樂舞者二人以朝露為衣見上美
孫權嘉興七年十二月扶南王花梅遣使獻樂

凡此曲有三說一者

四く加 一拍子

二者

初十拍子四く 末二拍子是

十二拍子說也八く初十拍子 加一拍子末二拍子加三拍子

三者初七拍子

皆吹替タル様也樂ハ千井サケレト云

此樂く説人不知事也

於十六拍子 者不知く

惟季ノ新ヲカレタル異曲ノ内也

勇勝新樂

破

拍子 十六

昔ハ舞ノ侍ケルニヤ道行アリト申タリ雖然近

来不聞く此破ハ秘事テテ侍其上既アリ

宇治禪定殿下ノ仰ニ云此破ノ樂ニ五常

樂破ノ様ニ於世吹ニスル説アリ又末ノ六

氣ヲ不延ニテ吹説尤秘事トセリ有

忠拍子説

拍子加三

作者未勅出之

當家ノ夢ノ説ハ時元ニル夢ノ説別帛注
中御家宗有沙譜之裏書ニ被注付
時光夢ニ時元傳テ糸向中見ニ相
セアリシ感涙雜押者歎十三太鼓已後
四ノ拍子ノ十ヲ吹替侍妾ハ別ニ可注之
於世吹所同其不可注之
急拍子廿六早物也加一拍子

春楊柳 拍子 十二 新樂

此樂吹樣可有之説一者於世吹如甘州可吹之

是惟加之度拍子一者早吹説如皇慶急吹之

一者吹忠拍子説名ハ大倍肝如拍子説

如陪

昔何レノ御時ニカ侍ケニ無双ノ管絃者
アツメテ樂合ト云事侍ケルニ元此忠拍子

之説ヲ以テ勝タリト申侍タリ惣テ此樂
ヲハヨク可秘ト申作者未勘出

夜半樂 拍子 十六 新樂

唐玄宗舉兵夜半誅畢皇后製

夜半樂 或書云有作者 秘事ナリ 惟季説六如五

常樂破吹之 有忠拍 子説 加之度拍子

承和聖主御前ノ御遊セサセヲハシメシケルニ

上達部殿上人退出給タル時夜深更ニ

ナリニケル可奏夜半樂儀定ニテ退出音

声ニ奏ニテ被出ケルニ時ノ音カ平調ニテ

侍ケニ珠面白カリケレハ陽明門ニテ出ニ

ヤラスセラレタリケレハ主上メテサセ給テ入

御モナクニテ御感アリケルトナシ

又云 南池院行幸及深更有還所此樂名号依應時奏此
夜半樂有興仍玉卿侍臣進出之時猶吹此樂至興退出畢

慶德 十拍子

新樂

或記云別殿行幸夜更タルニ奏タリ

此曲近真云又鷄云鷄有五德故作此曲云

漢土南一國 名鷄 頭國 其國ヲ打取テ悦テ

作此樂云鷄積云此樂有二樣一者

堀川院元政己下伶人等下給傳説 當時用之

二者口ノ音ヲ下吹スヘテ手ヲ吹替 此古流

トモニ加一拍子 白河院此樂ヲニリ三思食夕

リケル間其代伶人不沙汰云 此樂大判官傳アリ九三目錄ニモ不入拍氏家コト之

古娘子 十四拍子 又ハ新樂

大國有一太子雖歲長身置總其身

長三尺也生年八十一之 時 故 名小 此樂

有二說一者拍子十四 四ニ、一ニ、常說 二者

拍子八 八ニ、三度拍子 是秘説ニテ 當家說 拍氏嫡同也

老君子 十六拍子 又拍子十八又拍子八新樂

此曲大唐二八男子誕生之時奏此曲我

朝本院六十所賀日退出音聲用之但彈正入道内

被詔平此有禁忌而愚意存處者即大國二田力

子正生時用此樂何此朝之可有禁忌哉此樂

有二說一者四拍子二者十八拍子說千五火二

五下是未吹加也世人不知可秘之三者忠拍子說手吹替八加三度拍子

是大音虫物說也

王昭君拍子十又老君子前可書

明君漢元帝造之本朝絕早而南宮

從尺八吹傳所侍元又云我朝醍醐天皇

作改御延喜廿年所作之後管部有

之管部絶了中院位之時遷管部

或說云明君漢白也元帝時白奴單于入朝以侍詔王嬪配之以樂因録

八世二著人知之王昭君古事也仍畧之但少

記漢元帝時ニ夷狄ハカラ強シテ中國ハ
力弱ニ呼韓耶單センキカ来朝シテ時ニ漢ノ
塔タナラント願ヌレハ宮女三千人ノ中面ノアキヲ
畫ニカイテマイラセヨト勅セラレテ画アキノ毛
延壽ト云シモノカ物ヲ官女ノ方ヨリ多取テ
ワロキヲモコソ美人ニ昼ノ明妃ハ元ヨリ美人
ナレハ物ヲ不シ出依テニメヲワロク昼ホト單子トラ

セラレ琵琶ツ馬上ニテヒクカ故事也又單子ノ
方ニテ死ヲ埋テアル塚ノ上草ハカリカ青シ單
子ハエヒス北方ナレハ寒ク雪多ケレハ草皆
枯テ青ナレ昭君ハ中國ノ者ニテ其念中國ヲ
不忘ホトニ草カレスニテ青シ皓然詩曰
黃金不買漢家貌青塚空埋秦地魂
アリ秦地トハ中國ヲ云昭君ヲ題ニテ京極

會昌宰相李德裕所作也古老云祝
所祈所奏此曲所願成就云々

應和元年閏三月十日藤花宴退出音
声奏此曲早ハハ加之度拍子常ハ四ハ
ハ加一拍子也此樂ハ毎ニ惟季ニ流而未
カクノ面白侍ク時ニ尾張則成ニ致相傳也
仍目錄ニ入マウチニカセテハ人不知ク

林歌 渥右樂拍子十一管絃時自ニ及頭加之ニ

度拍子拾鈺鼓委ハ彼所ヲ可見

別裝束紫袍付金氣此曲ヲ或譜云林鐘調

ノ曲トシルセリサモアリ又ハニ拍笛ノ調ニ

吹テハ横笛下無調ニテ侍也下無調

ヲハリソウテウド申ナリ此舞ヲ出サント

思時先吹乱声舞出タレハ乱聲ヲ

ト、メテ祢取音律次當曲ヲ吹也舞人向西

拾足之加三度時拍子舞終久レハ樂止事又重

吹此曲八拍子也即加拍子出入大旨如左

或記云右樂ハ皆一拍子ニ上也

而上唐拍子之樂謂三拍子也有二所謂林歌

酣醉樂急是也破者上拍子也

此樂ニ返吹ヤウアタノ説侍ハ十二拍子ニ及ス

説十一拍子又説是ヲハ皆引物ニ付テ横

笛ニテ吹時ニモテイルヘト申久レ凡凡拍笛

又處ノ秘ト申久レハ拍笛ニモテ時ニモセ

吹ヘキニヤ當時伶人ノ中ニモ是テイルニ吹

催メリ此曲西寺ノ老鼠ト云事野ナリ

老鼠トハ呂催鳥樂也

又云此樂ノ調琴ノ下ニ可注之トモ書之

馬鳴菩薩ノ彈給箏也。賴吒和羅伎ト云

此曲ヲ聞人皆以發心出家入道ス。仍國王作

箏ヲ破ト云。賴吒トハ梵語也。琴ナリトイヘリ。箏ノ名トハ一定僻事也。

彼馬鳴ハ天竺ノ人之論宗ノ祖師也。

賴吒和羅伎ノ声ニ唱テ云

有為諸法如幻如化。三界獄縛無一可樂。

主位高顯。勢力自在。無常既至。誰得存者。

如空中雲。須臾散滅。是身虛偽。猶如芭蕉。

為怨為賊。不可親近。如毒蛇鼠。誰當愛樂。

此故諸佛常奇此身。此中具演無常。若空聞者倍道。

此声歌ハ南都興福寺玄高淨觀坊一説也。

賴尊注山星作也。又云。此前詞林歌ノ詞也。

此事當家ニ秘スルナレトモ子孫ノ者後世ヲ心

カケテ人ヲ勸メ我ニ来世ニハ佛ニ可成ト

思_レ幸哉佛菩薩ノ莊嚴ニ被用事ヲ
家業トシテ一生ノ間音律ニ心ヲカケテ如
形誓古嗜ノ身トシテ只イタツラニ佛法ヲ
窺カハサル事口惜次第也高ニ賤ニ舞_{カニ}
常ノ道ニ偽ナク所ヲカス習也何日何時カ
余所ニ思_レ堪_レイニ趣カント常ニ歎クヘシ
止觀七云無常ノ教鬼ハ不扶豪貴危脆

不堅難可恃怙云何安然規望百歲四方
馳求貯積聚歛々未足溢_テ然長性所有
產貨徒為他有負_ト獨逝誰訪
是非若賞_ニ無常_ニ過於暴水撞風掣
電山海空布_ニ无_レ逃避處_ニ如是觀_レ己_ラ心大
怖畏_ノ眠不安席食_ハ不甘哺如救頭燃
自以求_ニ出要_ニ矣_ト狗鳥_ノ无_レ日夜走競

大集経偈云妻子珍宝及王位临命终時
不随者唯戒及施不放逸今世後世為
伴侶ト云ク

古今ノ

紀實之

あはれぬ我身とありとわれぬ此身之とあり

定家口

世乃中ハ市此 坊志ヲ 物ノ人あり夕暮如 序

順徳院御製

きくばいよ何れとありい出たり世乃人の愛をうん

慈徳如商

みふく乃志のうらむと志ぬあはれぬ心

こはね志すにいま何すた末代は邪法

のそ元海して正法よあふ人まれありい

めも若知識をあつて法佛にい

法を修むるにけよ成終といふ事
了らば衆生といはれ乃法をりて成
佛と稱尊は是におうれむる事
て可修教り先祖より傳ふ此
て傳今更可及やをりて時
世を修むるの事は人をも地獄
おとすむる事便乃事也

偈頌

是の石清水修西は觀音經ノ世尊
偈ヲ頌ハ音振ニ樂ヲ作念テ也
平調物加拍子ノ時歩ニ度拍子也
十二反有る其時末ニ反加之

此の偈頌は平調物加拍子ノ時歩ニ度拍子也
十二反有る其時末ニ反加之

雙調

樂書要錄曰夫木陽氣盛則而茂東
內有仁恩其位東方其時主春其声主
角是故仁君好生而惡奪見人飢
寒則心為之悲事之勞苦心為之哀
與人同愛樂當於宮夾鍾用鼓
和樂於東郊

禮記月令曰孟春之月日在營室昏

參中且尾中

孟長也日月之行一歲十二會樂王因其會而分之以為大數焉觀

斗所建命其四時此云孟春者日月會於諏此言而斗建寅之辰也九記昏明中星者為人其

日甲

南面而聽天下視侯以授民事

乙

乙之言乾也日之行春東從青道發生万物月為之作時万

物皆解矣甲自抽軌而出因以為日名焉已下為月名者君統臣切也

其帝大

皦其神句芒

此倉精之君木官之臣自古以未着德立功者也大

皦安戲氏句芒少皞氏

其蟲鱗

象物字中將解鱗龍

之子曰重為木
下蛇之屬

其音角

謂樂器之聲也
三分羽益一以

生角數六十四屬木者以其濁中民象也春氣
和則角聲調樂記曰角亂則憂其民死九聲
尊卑取象五行數多者濁數
少者清大下之不過宮濁細不過羽

律中大

簇

律候氣之管以銅為之中猶應也孟春氣聖
則大簇之律應謂吹灰也大簇者林鍾之所

生三分益一律長八寸九律空圖九分
周語曰大簇所以金鬱湯出涕

春庭樂

新樂或古樂中曲舞

出入調子四帖拍子各十終帖加二度

拍子一及時末二加拍子當曲号春庭花有

舞着別裝束其時才三及搔第四加搔

二度拍子秘也只拍子時第六太鼓六鞀鼓也一名

春庭花又春庭子又夏風樂

此曲延曆御時遣唐使舞ヒイク生久礼

真藏

サ子カウ
或真

則給内教房奏沙前

初大食調為樂而承和沙時有

勅改成双調ハクニ仍春節會冬音声

用之古樂懸一
鼓故也

舞時者

新樂一又云
説古樂

此樂從土位下和少部大田麻呂

所作云

其時拍子九
謂夏風樂

此舞中古絶ヨシ天下ニ其調アリ仍堀河院

沙時百老季有沙尋處習傳以説之

由申上仍於沙前有沙覽舞人

老季行高
光則光時

其日相遠アリ兩人於舞臺上右ヲカメ又

キテ舞ケリ入時ニ行高ハ如本袍着入リ光

季お者カメ又キナカラ入早而説沙覽ニテ頗

有沙感之後世人有舞之由始知之

古記云

此舞裝束如古鳥菴冠着劍帶舞姿如
地久也年号月日ナシトイハ上元家譜ニシルシヲク所也

舞人出吹品入時吹入調

柳花苑シズク新樂中曲舞十之拍子廿四及時

未六加之度拍子早只拍子物也

本者柳花怨云而天曆川宴之日有後定被改怨字苑字定置云々

昔ハ此曲ニ舞アリケレトモ絶テ久ナリテ侍トモ

舞ノ有ケル時ノ様ハ之ルキ事ニテ侍ハ之ルニ侍也

桓武天皇御時遣唐使倭生久礼真氏所傳渡

也其時者一二三拍吹各無間拍子三切舞

終後音取并笙笛急ニ吹加間次欲止拍之

時暫有其間吹止拍一切連次音取次

詠前如次六七拍ヲ急ニ吹則加本是者

大食調曲也而兼和沙時改テ被渡双調

早八拍子物也彈物ニ無樂拍子忠拍子斗也

惟季之説ニハトモニ侍也時元説ニ樂拍子延八拍子吹云々

堀川院ノ御時ニテハトモニ侍ケルヲ天皇忠
 拍子ヲアイセサセ給ケルニヤカテ樂拍子ヲ人
 ナラワスニテ知タル人スクナク侍也忠拍子ハ
 ヤスク御樂ノ拍子ハ所セク侍也加拍子
 時打ニ度惟孝ノ秘説才ニ十四拍子間
拍子可吹六韜鼓
出雲已講明遺物語同此樂ハ正説ハ世人
當家ニ以此説為秘事也要クニラス侍也ヨク可如トナリ

渡物曲

鳥破春寫轉入胡飲酒破

嘉慶急武德樂急賀通用

已ニ七曲抄御時制所被渡是雙調
 也仍書續之具見本調子外未目錄
 古中門門右右臣宗忠之家目錄也
 加地久急八曲注セリ

口傳云

吹渡物時者不息入微音ニニナクト手
スリナニ可吹之是忠政朝臣并惟孝之
貌也知是流入院殿下者双調渡物
ニハ息ヲ入テソアソハシケル 和云微
音モ又息ヲ入テモ皆コノムヘキニアラス
大方定タル物也

鳥破 拍子ハ打物口傳如本調子

此樂ハ忠拍子吹也 有換頭ヲテカセテ

ノ人如本調子ノ嚙頭アリトハシラス也 只

口ハカヘリク 吹説モアレトモ其ハ習ナリ

吹説ナリ 宗忠大臣家ノ吹説ニハ吹出モ六

吹計ノアソハシケルソレモメツラシク保知テ侍ヘ

如外拍莫葛 伊遊之時者 無抄物又打物
年ニアリ 尺拍子

有所^三加拍子時者

古樂揚拍子打之

急拍子八

昔八忠拍子ニ吹ケレト元今ハ樂拍子ニ吹己

ニ元喚頭了也廿レト元一乃歲樂吹様ニ

打替ノ可吹也加拍子時

ニ度拍子

古託云

堀川院時於沙前有沙遊双調之

右大臣宗

鳥破急渡ノ声哥被出仕

伴鳥破渡物時通普人者兩邊吹時

者初之吹出者從上穴吹出次度吹出從

六穴吹出也

如換頭也

是常事也然而伴

宗忠後六穴吹出定声哥被出仕其時

堀川九大臣

後房

被問云被出仕如何

被問宗忠答申云是從本鳥破ノ雙調

渡之時、只每度從六元可吹出也。是宗忠
家所習傳也。被申云々其時在大位年未
度、承、每度、從六元吹出、解、二声哥之間給
者、所尋申也。尤有此事也。被申云々
又云、久安三年七月八日夜、宗能大納言物諸
承傳也。但宗能大納言者、少遊時、每從上元被
吹出、若此說、未被傳、歟。同流、相遠如何。

仁平二年三月一院、少賀少遊留侍、從大納言
成道卿被吹時、自六元被吹出、吹云々、云々
於破急之、嗔頭者、尤面白、說也。當時者
不秘之

嘉殿破拍子十

古目錄、六入ラレ侍子トモ、近來、虫物、常、
アリケニ侍ヤ、是モ忠拍子ニ吹、ハ、加拍子時、
三度拍子、私云、當時ハ、常ニ管ニ用之

急 拍子二十

是元志拍子ノ説佛トモ近來沙前之御遊

三毛樂拍子ヲ用ラレ侍也加一拍子

春鶯囀楓踏 拍子十六謂中序也

是樂拍子忠拍子七ニ成物ニ用本調子

三拍子不_レ加侍子トモ式講躰ノ事ニ可加

拍子ニ度拍子ニ可上也

當家ニ本調子ニ加テ
秘トス志拍子同秘之

同入破

拍子十六謂破也

是元樂拍子忠拍子共ニ佛也加拍子事

六鞞鼓ノ物ニハナキ事ナレトモ古老ノ記云

講讀等ニ加之如林哥上ニ拍子也

其上堀川院ノ御時ニハ六鞞鼓ノ物ニ拍子

上タル事ヤアルト諸道ヲ御尋アリニ拍花季

奏云中古無双ノ管絃者侍リ六字名号ニ

作合テ謂六拍子也其説加之度拍子け説

不用幸廻忽ノ及口六鞞鼓ツキ拍子ト云

六鞞鼓也即加拍子時之度拍子也け説

勝タリ有口傳事也

凌王破 拍子十六

是モ舞ノ時ヨリモユクト吹ヘシ忠拍子侍

トモ今世ニハ常ニ不用加拍子様ハ奈

良様ヲ用ヘト申タリサモ侍ナム

北庭樂 拍子十四

是ハ樂拍子ニ吹ヘシ加拍子打ニ拍子

胡飲酒破 序侍トモ常ニ不用 序ハ七拍子 破ハ十四

是モ忠拍子アリサレトモ呂哥 田中并産ニ合タル

ユニ樂拍子ヲ用タルガリ但哥合時ハ少

除所ノアル也加拍子 一拍子

酒胡子 拍子十四

是无乐拍子二吹也加拍子時 打一拍子

武德樂急 拍子十二

此曲本調子ニテ吹ニハ少ク吹替タル也

加拍子様ニテ拍子ト申珍ク侍忠拍子ニ

无吹トモ當時不用之

新羅陵王急 拍子十二

此曲ニモ又ノ説侍トモ用十二拍子之説

也樂拍子ノ早吹ノ物也加拍子時 打一拍子

廻杯樂 拍子八 但常不用之

此ハ忠拍子ニ吹ヘシトアリ曳物ニ有故ニ

追代加拍子時 打三拍子

地久急 拍子十 渡古樂 早八拍子物

加一拍子一説ニ急拍子

随風強ヒラ字揚花舞使而擔ヒラ問作雨声
春水船如天上坐老年花似霧中有
一いつ是れ比乃事よの太宮右大臣殿上之れ
時南殿乃さうしうりやうあはれう急所より
装束とつたあはれして御潜れととほく福を
をふり免られきりか出さるるはる大内山の
春曙れよふあはれひんあみあれたる高欄よ

さうりか里て扇を拍子よ打て橋人の曲
を教及ううたれはるに多政方が陣直引と
あはれいけあ奇れし急をさうて花乃れとに
すといと地久破をいうまつりあうり
花田物名袴をさあはきさるる舞うと
入る時橋人をあはれ免て裏山をうたれ
急にあはれ又急歸う同急をまむり

いみじくも河のりあるも也

一博雅卿ハ上古に生れたる管絃者也

まればりる時天よ音楽乃解るるに元り

比来よ聖心上人といふ人ありる天を去り

微妙此音楽あり笛ニ生^等ニ琵琶各一鼓

き之り世間此樂めをいふ可し思議

目出りりれハ上人のやして庵室を出て

樂此急に付しゆきれハ博雅此もま

よありにりむまれかりて天の急うま

ぬ上人他人の事なり教目を傳て又博

えむして其の生見れ母よ此瑞志を傳

なむ博雅ハ子息二人あり一人ハ信義

笛此上手也一人ハ信明琵琶乃上手也

也信義をハ双調乃君と其号を其取

式部にふ時此管絃者伶人おを率て河
陽よあそひ流るるよ明月の夜曉に此をきて
河勢好うきうらに双調此調子を吹て色
船ありその舟やうく来しうら^{やうら}吹てをきう
ふ城よ神妙なりうり我輕ふ此歌あき笛也
誰人か^んんとく^くらや^くく^くあ^くく^くあ^くく^く
船の勢にこめ^くま^くてみ^くく^くう^くら^くく^くあ^くく^くおと

とうりきあふくすてい舟とくとわらふ時
親まもれよ^あと^あい^あ流^あい^あれ^あ信義と名たり
き^あに^あ宮^あ感^あふ^ある^あの^あ雙^あ調^あ此^あ君^あひ^あり^ああり
と^あれ^あま^あを^あさ^ある^あ共^あれ^あう^あと^あ下^あ皆^あ双^あ調^あ此
君と号あると也

一^{若紫}や^あふ^あひ^あ乃^あほ^あこ^あり^あと^ああれ^あの^あ系^あれ^あ花^あさ^あう^あり^あい^あみ^あか
あ^あれ^あよ^あり^あふ^あ乃^あさ^あう^あく^あの^あ海^あく^ああ^あり^あに^あて^あい^あ里

まておはすまきに露れたは花満るを
のうみおきこい新き満るあゝい路
取せきし歩身よて免つゝうおかされたり
ふらとるやまゝにぬきうららそら
山風の中のし吹多りよ漸れよとら
ほらしてをとたふさこゆ

一 絃管奏ら成山鳥啼猿羅留作野花開

一 阿多^(四)おほくそといたうすて山花多
とうこらとれくさつらあはらるる
あゆみよ花とも色ふらり満る
にさきよあはらるるに満るたはあり
くもあつゝらるる
いんさき花乃るあにまゝとわすらひ
地の上侍むああけりうねとれあ伊

さすふいしきれ

世^{チノ}ゆりよくやにいでたひあつて

さめぬいぬにけしきもあつて

さ海を正さるゝあつて

雪後園林終半樹 水邊籬落忽横枝

林和清

疎影横斜水清淺 暗香浮動月黃昏

あつて

無といふ事むしきもあつて

あれいふ事むしきもあつて

思ひをうけいやくの戸をぬき

乃がふ事あられありき

芥をほろ古事をいふ

あつて

にてもあつて

中御門の内大臣宗純宗息家家大納言と
 て神宗御孫宗義宗とて屋敷宗とて神宗と
 たる人ありしに方後白河に法皇法に如存
 存の依とありしにむねつとこれ中納言と
 志して後これよりなりてまささうり後
 承平

色正然ふハ命を絶るむと云ふことありしを
 承平

とうふく屋敷に居られきあるにやうて申を
 法皇にありしにむねつと年比よりなりしに
 あり又法皇御孫と見えれはとらら海に
 といひいて明らうなる女房に人師子の
 うを法皇法まうまる茶茶枕枕ををしてま
 つるとしうすやこれ中納言とてこの
 をつとてしきしなりしを

いしきもあまのこゝろよまあるよまある
女房これ梅をたけぬ
そのまをまもるよまあるよまある
尾ぶうにわらわを伴うて
あゝいさゝか

よみ人しるし

いしきもあまのこゝろよまあるよまある

越前楽の流家なる海れて
あまのこゝろよまあるよまある
はきい下をたけぬ
乃ういよよ時
事詩やこの遊これ
身代をいられを

南無妙法蓮華經

正四位下行前筑後守豊原朝臣統秋判



